令和２年「阿蘇の農耕祭事」記録集

令和３年３月

阿蘇市教育委員会

○はじめに

この記録集は、令和 2(2020)年 2 月から 10 月にかけて行われた国指定無形民俗文化財「阿蘇の農耕祭事」の調査記録となります。

「阿蘇の農耕祭事」は、阿蘇神社や国造神社を中心として行われる農耕祭事で、「<前略>よく古式を伝承しているとともに、四季を通じて一連のまとまりをもって執行されている。このように四季を通じて収穫祈願から豊作感謝、風害、霜害の防除まで一貫した祭事が行われる地域は現在殆(ほと)んどみられず、我が国の農耕生活の推移、庶民信仰の姿を知りうるもっとも典型的な事例として重要である(文化庁国指定文化財等データベースより引用)」ことが評価され、昭和 57(1982)年 1 月 14 日に国の重要無形民俗文化財に指定されました。また、これに先がけて「阿蘇の農耕祭事」の構成の一つである阿蘇神社の御田植神幸式が「阿蘇の御田植」として記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に選択されています。

ご周知の通り、平成 28(2016)年 4 月に発災した熊本地震において、阿蘇神社をはじめとして、阿蘇の農耕祭事に関連する神社等が被害を受けました。その最たるものが阿蘇神社の楼門であり、現在も復旧工事が行われています。しかし、そのさなかにおいても、限られた境内や施設を利用しながら、神社職員や氏子の方々の尽力あって、様々な祭事を続けてきました。

本調査を行うきっかけとなったのは、国造神社の氏子の方々から「将来的に『御田歌』の音声あるいは映像記録をしたい」という声があがってきたことからです。阿蘇市教育委員会としても、近年の調査が乏しく、かねてから現時点での調査が必要であるとの認識があり、今回映像記録調査の前段調査と位置付けて実施することとなりました。

残念ながら、令和元年末ごろから広まった新型コロナウイルス感染症の感染拡大により、令和 2 年 4 月以降の祭事のほとんどが中止や変更を余儀なくされました。特に阿蘇神社の御田植神幸式は、戦前の内牧空襲(昭和 20 年)以来の神幸行列中止となり、神事の簡略化を行ったことで、結果として貴重な記録となりました。しかし、例年通りの各祭事を把握するためには、感染症の流行が終息した段階で再度調査が必要となります。そのため、本書は前々段調査の扱いとなりますが、今後同様の混乱があった際、祭事を継承する方々にとって「祭事を全て中止とせずどのように継続するか」を検討する場合の一助となることを願います。

○例言

１．本書は、阿蘇市に鎮座する阿蘇神社、国造神社および霜神社等で令和２年に執り行われた「阿蘇の農耕祭事」の調査記録である。「阿蘇の農耕祭事」は、昭和 57(1982)年１月 14 日に国の重要無形民俗文化財に指定されている。

２．本調査は、祭事に関する現地調査を通して、祭事の現状と変遷を把握し、後世への継承に資することを目的に行った。

調査日程：阿蘇神社の踏歌節会（とうかのせちえ）　令和２年２月６日(旧暦１月 13 日)

国造神社の踏歌節会	２月９日(旧暦１月 16 日)
阿蘇神社の田作祭	３月 15 日～21 日(3 月巳の日～亥の日)
国造神社の春祭り	３月 28 日
風祭	４月 26 日(旧暦４月４日)
	８月 22 日(旧暦７月４日)
国造神社の御田（おんだ）祭	７月 25 日・26 日
阿蘇神社の御田祭	７月 27 日～29 日
国造神社の眠り流し	８月６日
阿蘇神社の柄漏流（えもりなが）し神事	８月６日
霜神社の火焚（ひたき）神事	８月 19 日(乙女入れ)
	10 月 16 日(乙女揚げ)
国造神社の田実（たのみ）祭	９月 23 日・24 日
阿蘇神社の田実祭	９月 25 日・26 日

３．本書の調査、執筆、写真撮影はすべて入江捺月(阿蘇市教育委員会教育部教育課社会教育係)が行った。

４．本文中の地図の内、図１は「阿蘇市指定有形文化財阿蘇神社建造物調査報告書」より引用した。その他の地図は、国土地理院地図と OpenStreatMap を使用しており、その別は地図内に表示している。

５．国指定時の解説文は、すべての祭事が神事ではなく「火焚行事」や「田実行事」など行事と記されているが、本書では現在一般的に呼称されている名称で表記する。なお、現在は一般的に「火振り神事」と呼称されるが、内容としては神事ではないため、本書では「火振り」と称する。

６．本調査を実施するにあたって、次の団体や個人の方々からご協力、ご教示をいただきました。記して謝意を表します(順不同、敬称略)。

阿蘇神社　国造神社　霜神社　阿蘇神社氏子会　阿蘇神社御田歌保存会　阿蘇神社旧社家の方々　国造神社氏子総代の方々　霜神社氏子の方々　風宮氏子の方々　歳禰（としね）神社氏子の方々　その他御前迎（ごぜむか）えの坂迎（さかむかえ）に関係する方々

７．本書の編集は阿蘇市教育委員会が行った。

目　　次

〇はじめに

〇例言

〇目次

〇「阿蘇の農耕祭事」関係神社概要

１．阿蘇神社　…………………… 1

２．国造神社　…………………… 4

３．霜神社　…………………… 5

４．その他　…………………… 6

〇「阿蘇の農耕祭事」関係神社位置図　…………………… 8

〇「阿蘇の農耕祭事」に関する研究　…………………… 10

〇令和２年「阿蘇の農耕祭事」の記録

１．阿蘇神社の踏歌節会（とうかのせちえ）　…………………… 12

２．国造神社の踏歌節会　…………………… 15

３．阿蘇神社の田作祭

　３－１．横莚（よこむしろ）神事　…………………… 17

　３－２．御前迎え（ごぜむかえ）　…………………… 21

　３－３．宅（たく）祭り　…………………… 30

　３－４．祭り揚（あ）げ（田作神事）　…………………… 32

４．国造神社の春祭り　…………………… 35

５．風祭　…………………… 36

６．国造神社の御田（おんだ）祭

　６－１．前日遷座（せんざ）祭　…………………… 41

　６－２．御田祭　…………………… 43

７．阿蘇神社の御田祭

　７－１．前夜御遷座祭　…………………… 45

　７－２．献幣（けんぺい）祭　…………………… 47

　７－３．翌日祭　…………………… 51

７－３．後夜御遷座祭　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・52
８．国造神社の眠り流し　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・54
９．阿蘇神社の柄漏(えもり)流し神事　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55
１０．霜神社の火焚(ひたき)神事
１０－１．乙女入れ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
１０－２．乙女揚げ　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・59
１１．国造神社の田実(たのみ)祭
１１－１．田実祭　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61
１１－２．翌日祭　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
１２．阿蘇神社の田実(たのみ)祭
１２－１．田実祭　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
１２－２．翌日祭　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
○参考文献一覧　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・67
○おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・68

○「阿蘇の農耕祭事」関係神社

１．阿蘇神社

古来より阿蘇中岳火口を御神体として信仰され、後には肥後国一宮として崇敬を集めてきた。社伝では孝霊9(前 282)年と伝えられ、肥後国を代表する名神として「延喜式」に記載される。明治時代に国幣中社から官幣中社を経て、大正 3(1914)年には官幣大社となった。

（１）祭神

一宮・健磐龍命　阿蘇大明神、阿蘇都彦とも呼ばれる。神武天皇の第二子神八井耳命の御子。
二宮・阿蘇都比咩命　草部吉見神の娘で、健磐龍命の妃。
三宮・国龍神　草部吉見神、彦八井耳命とも呼ばれる。阿蘇都比咩命の父神。
四宮・比咩御子神　国龍神の妃。
五宮・彦御子神　速瓶玉命の御子。惟人命とも呼ばれる。
六宮・若比咩神　彦御子神の妃。
七宮・新彦神　三宮・国龍神の御子。
八宮・新比咩神　新彦神の娘神。
九宮・若彦神　七宮・新彦神の御子。八宮・新比咩神の弟神。
十宮・弥比咩神　新彦神の妃。
十一宮・速瓶玉命　健磐龍命の第一の御子。国造神社の主祭神。
十二宮・金凝神　綏靖天皇。神八井耳命の弟で、健磐龍命の叔父にあたる。

一宮・三宮・五宮・七宮・九宮が一の神殿、二宮・四宮・六宮・八宮・十宮が二の神殿、十一宮と十二宮及び「延喜式」神明帳記載の全国 3,132 座の神々が諸神としてが三の神殿に祀られている。

（２）境内

一の神殿・二の神殿・三の神殿・楼門・神幸門・還御門の 6 つの社殿群は、天保 6(1835)年～嘉永 3(1850)年に肥後細川藩の全藩的事業として建造された。大工棟梁は小川町(現宇城市)出身の水民元吉が務めた。楼門は二重門として九州最大の規模を誇り、両脇の神幸門及び還御門は御田植神幸式のみで使用される。さらに江戸時代末期の建築的特色を残していること、様々な史料によって造営経緯や大工名が明らかであることから、国指定重要文化財に指定されている。境内には、この他に拝殿、社務所(神徳館)、斎館、山王社庚申社、北門守社、南門守社、南北の鳥居がある。参道は楼門及び神殿群に対して垂直方向に延びており、全国でも珍しい横参道となっている。

平成 28 年熊本地震により、楼門をはじめとしてほとんどの社殿が被害を受けている。一の神殿・二の神殿・三の神殿・神幸門・還御門は、平成 31(2019)年 3 月に復旧が完了。国指定文化財以外にも斎館と拝殿が特に大きな被害を受けたが、斎館は平成 30(2018)年 11 月に復旧された。拝殿が全壊したため、神饌所と社務所の間に仮拝殿を設置し、主な神事等の場となっている。

令和 2 年は、倒壊した楼門及び拝殿が復旧工事中である。

（3）熊本地震後の祭事

震災後、各社殿の解体や復旧工事のために様々な境内の制限がありながらも、形を変えて農耕祭事を行っている。特に御田(おんだ)祭及び田実(たのみ)祭は、境内環境が祭事に大きな影響を及ぼしている。

例年の御田祭では、神幸行列が還御した後、各神殿の周りを行列が廻り(宮廻り)、拝殿横で御田植式と呼ばれる苗なげが行われるが、平成 28(2016)年の発災後から令和元(2019)年までの御田祭においては、三つの神殿及び拝殿の復旧工事の影響でこの宮廻りは実施されず、代わりに神殿の外塀を行列が一周することで宮廻りに見立てている。

田実祭では流鏑馬(やぶさめ)の奉納が楼門の参道で行われるが、楼門の解体撤去工事の影響で参道の幅が制限され、平成 28 年・29(2017)年の流鏑馬は中止となった。

同様に参道の範囲が狭くなったことで、3 月の田作祭・御前迎えの行程の一つである火振りの範囲も狭くなっている。

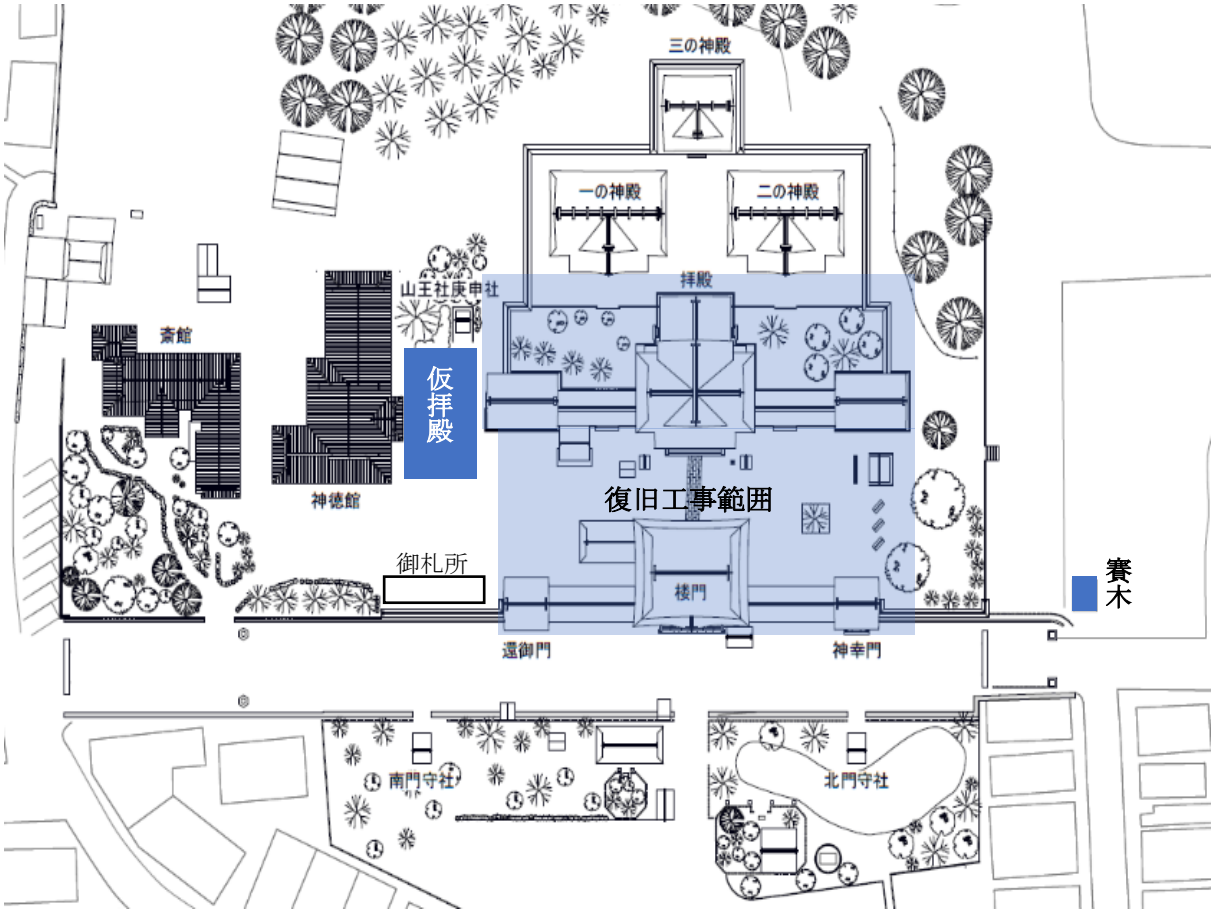


図 1　令和 2 年阿蘇神社境内図

（4）飛地境内

阿蘇神社の飛地境内については以下の通り。各位置については、図 4 及び図 5 を参照。

a. 一の御仮屋（おかりや）

一の御田（おんだ）、一の行宮（あんぐう）とも呼ばれる。御田祭の神幸行列がはじめに立ち寄る御旅所となる。御田歌は、この一の御仮屋を出発するときから歌い始める。また、一の御仮屋までは神輿は四の輿～一の輿、神職は下位～宮司の順であったのが、出発するときには一の輿～四の輿、宮司～下位の順に変わることから、御田祭において重要な役割を持つ御旅所であることがわかる。村崎氏(1993)は、上記の特徴から、一の御仮屋は御田祭に係る神霊(穀霊)が発現する場所ではないかと考察している。

b. 二の御仮屋

二の御田、二の行宮とも言う。御田祭の神幸行列が一の御仮屋の次に立ち寄る御旅所となる。一の御仮屋、二の御仮屋ともに昔は祭りのたびに毎年新しく作られていたが、明治以降常設の建物となった。二の御仮屋は平成 28 年熊本地震で被災し、同年の御田祭からは仮設のテントを 2 張建てて祭事を執行している。

c. 賽木（さいのき）

阿蘇神社職員は「マエギノモト」と呼ぶ。阿蘇神社第二駐車場の入口付近に位置する。田作祭の御前（ごぜ）迎え後の町内めぐりにおいて左弓(右手で弓を持ち、左手で矢を射ること)を行う 2 か所目にあたる。また、御田祭においては、神幸行列が阿蘇神社境内に還御する前に賽木の周囲を時計回りに一周するなど、阿蘇神社の祭事において重要な役割を持つ場となっている。阿蘇大神(健磐龍命（たけいわたつのみこと）)の御手植だという伝承がある。

d. 宮地の風宮

祭神は志那都比古神（しなつひこ）と志那都比女神（しなつひめ）。風祭の出発地。

２．国造神社

阿蘇神社の北に位置することから、北宮とも言う。阿蘇神社の祭りとほぼ同様の祭りが年間を通じて行われている。

（１）祭神

速瓶玉命（はやみかたまのみこと）　健磐龍命（たけいわたつのみこと）の第一の御子。阿蘇国造。

雨宮媛命（あまみやひめ）　速瓶玉命の妃。

髙橋神　速瓶玉命の御子・惟人命（これひとのみこと）の弟神。

火宮神　髙橋神の弟神。

国造神社の程近くに、県指定文化財である上御倉古墳と下御倉古墳があるが、これはそれぞれ祭神である速瓶玉命と雨宮媛命の御神陵（しんりょう）であると伝承されている。

（２）境内

神殿、拝殿はともに阿蘇市有形文化財(建造物)に指定されている。拝殿の左手前に神輿を納める神輿舎、左手奥に門守社が位置する。また、二の鳥居の手前に水神社、一の鳥居と二の鳥居の間に北宮館(社務所)がある。末社として、本殿に向って右側に「鯰（なまず）社」がある。ここには、健磐龍命の鯰退治の伝説に出てくる大鯰の霊が祀られているという。

この他、阿蘇市指定天然記念物「ほおのき(朴の木)」と、元国指定天然記念物「手野の大杉」(平成３年台風 19 号により折損)が境内にある。

平成 28 年熊本地震では神殿・拝殿・二の鳥居等が被災し、平成 30(2018)年度に復旧した。

図 ２　国造神社周辺位置図

３．霜神社

阿蘇市役犬原に位置する神社で、健磐龍命に無礼を働いたことで手打ちにされた鬼八の霊を慰めるために創建されたと伝わる。火焚神事は、健磐龍命に殺された鬼八が怨霊となり冬になると霜を降らすため、その首を温めるために始まった、との伝承がある。

（１） 祭神

霜凝日子神、鬼八天(鬼八)、天津神等多くの説があり、定かではない。鬼八の民話と関係する神事が行われているため、一般には鬼八が祀られていると信じられている。

（２） 境内

霜神社境内の施設としては神殿と拝殿のみである。火焚神事で火を焚く場所（火焚殿）が、道をはさみ数 100m 先の斜め向かいに位置する。火焚殿は祈祷所の上部に御神体を安置する小窓が設けられており、祈祷所奥の火焚所で火を焚くことで、上部にある御神体が温められる構造になっている。平成 21 年に神事中の火災により全焼し、平成 22 年に国庫補助事業を活用して復旧したことにより、現在の外観となっている。また、火焚殿と同じ敷地内に神楽殿と御手洗社がある。

火焚殿から約 50m南に天神があり、火焚神事の神幸行列が必ず立ち寄る祭場となっている。天神には、榊の木があるだけである。

平成 28 年熊本地震では、鳥居と玉垣が軽微ながらも被災し、特に鳥居は人的被害を考慮して平成 28(2016)年度は撤去した上で神事を執行している。平成 29(2017)年度にすべて復旧した。

図３　火焚き神事関係位置図

５．その他

（１）吉松宮

御前迎(ごぜむか)えの神幸行列の出発地である。ここで阿蘇神社の神職が樫の木から御神体のヒメゴゼと御供が入った柴(シバ)を作る。約 300m 南方向の森の中に社殿(元宮)があったが、焼失したために現在の地に遷ったと伝えられている。元宮があったとされる場所には、市指定天然記念物である「宮山元宮の樫(かし)」と「宮山元宮の欅(けやき)」がある。かつては御前迎えの柴の材料は、神社の裏山(元宮周辺)から神職が目隠しして選んでいたというが、現在は氏子が事前に調達している。祭神は国龍(くにたつ)神(阿蘇十二神の内三宮)と比咩御子(ひめみこ)神(同四宮)。

平成 28 年熊本地震では、拝殿が大きく傾き大規模半壊規模の被害を受けた。地元住民らの尽力で平成 29(2017)年 1 月には復旧し、その年の御前迎えを執行している。

（２）濱(はま)神社

地元では「濱宮」とも呼ばれ、元は北側の贄塚(にえづか)(二辺(にべ)塚)の近くにあったという。贄塚には中世に阿蘇家の浜の館が置かれ、その守護神として濱神社が祀られたといわれている。祭神は新彦命(阿蘇十二神の内七宮)、新比咩(にいひめ)神(同八宮)、若彦命(わかひこのみこと)(同九宮)、弥比咩(やひめ)神(同十宮)。

御前迎えで吉松宮の次の御旅所であり、地元では昔は御前迎えの一行が立ち寄るのは濱神社だけだったという伝承がある。

平成 28 年熊本地震で神殿･拝殿の他鳥居等境内がそれぞれ軽微ながらも被災し、平成 30(2018)年度にすべて復旧した。

（３）坂迎の場所（山下・渋川・蔵原・竹原）

御前迎えの坂迎を行う上記に挙げた場所は、すべて旧黒川村に位置する。山下・渋川は昔から地主宅で坂迎を行っていたが、山下は地主だった家が転居したことから、同じ敷地内に転入してきた H 家が座元となっている。蔵原は、戦前戦後は行程上の個人宅で行っていた坂迎を、昭和 43(1968)年に公民館ができてからは蔵原公民館で行うようになった。竹原も同様で、村崎氏(1993)の調査時までは 3 軒が輪番で行っていたが、いつの頃か竹原公民館で坂迎を行うようになった。

（３）薬師堂

真福寺嘉祥院跡で、御前迎えにおいて竹原の次の御旅所である。ここで左弓に使用する青竹で作られた弓を 2 張、矢を 4 本作成するなど、重要な役割を担う場所である。

地元では、この薬師さんが阿蘇の明神様と嫁御の仲人であるという伝承がある。

（４）塩井神社

御前迎えの薬師堂の次の御旅所で、ここでヒメゴゼと御供の柴の中身を取り出して水をかけて清める「嫁さんの禊(みそ)ぎ」*が行われる。中世～近世の文書においても、塩井川あるいは塩井社におけるお祓(はら)いやお清めに関する記述が残っていることから、御前迎えの行程において重要な位置付けであることがわかる。祭神は罔象女神(みずはのめのかみ)。

境内の段下、参道と垂直に交わる形で塩井川があるが、現在は水無川となっている。

（5）歳禰(としね)神社

田作祭の横莚(よこむしろ)神事及び田作神事の舞台の一つ。同じく田作祭の御前迎えでは、神幸行列がこの歳禰神社の横を通る際は発話を禁止する。拝殿は地区の公民館も兼ねている。祭神は国龍(くにたつ)神(阿蘇十二神の内三宮)あるいは歳禰神。

北西の方向に歳禰(としね)神社氏子の畑があり、横莚(よこむしろ)神事の際はその一画を斎竹(いみだけ)で囲い祭場とする。地元では、横莚神事は昨年の嫁さんと歳禰神の離縁の儀式であるとの伝承がある。一方、村崎氏によると横莚神事は神霊を冬の眠りから起こし、その年の新しい歳神として復活させる儀式であると考察してる。

（6）田鶴原(たづわら)神社

祭神である新彦(にいひこ)神の妻が天女であったという、羽衣伝説が残る神社。ある日三人の天女が水浴びをしていたところ、新彦神が羽衣を一つ隠してしまった。羽衣を隠された天女は帰れなくなり、新彦神と夫婦となり、やがて天姫(新比咩(にいひめ)神)と天王(若彦(わかひこ)神)を産んだ。子どもたちの乳母が子守唄で「おまえの母の羽衣は、せんばこずみの下にある」と歌っているのをきき、天女は羽衣を発見し天に帰って行ったという。地元では、昔田鶴原神社の境内に池があったという伝承がある。祭神は新彦神(阿蘇十二神の内七宮)をはじめ 7 神。

（7）手野の風宮

祭神は志那都比古(しなつひこ)神と志那都比女(しなつひめ)神。風祭の到着地。この神社の近くに風穴(ふうけつ)があり、ここに悪風を封じるのが風祭の神事であるという。しかし、現在この風穴は穴がふさがっており、地元では国造神社の側にある上御倉古墳・下御倉古墳を風穴に見立てている。

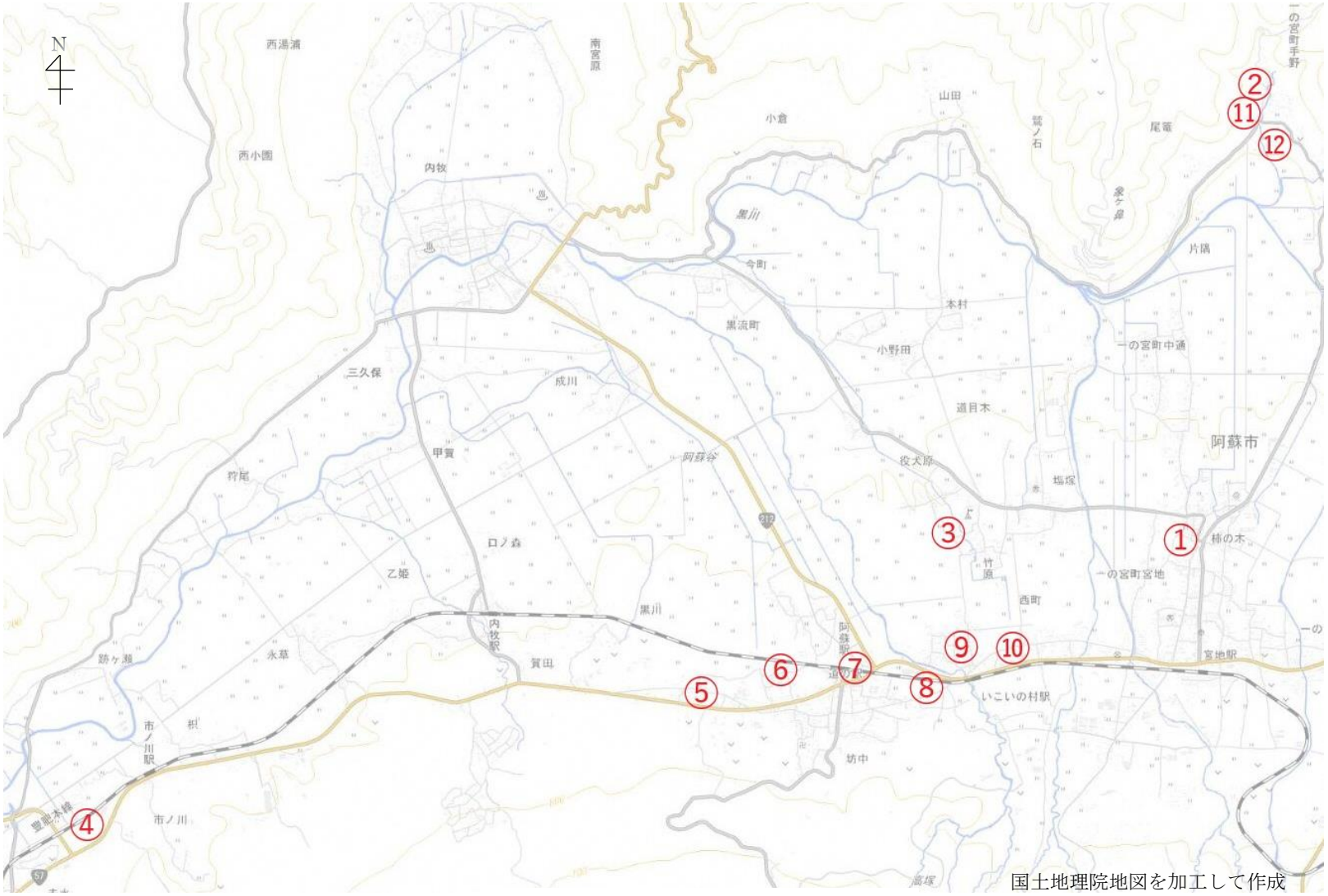
（8）国造神社の御仮屋

国造神社から約 1 ㎞離れた田園の中に位置する。阿蘇神社の一の御仮屋と同じく、御仮屋を出発するときから御田歌を歌い出し、神輿に苗を投げる御田植式が行われる場所である。

隣接する南側の田が国造神社の神田となっている。

＊ 一の宮町(1984)では「シオイカキ」、村崎氏(1993)では「嫁さんの湯浴み」で表記される。
本報告書では、阿蘇神社での名称「嫁さんの禊ぎ」で表記する。

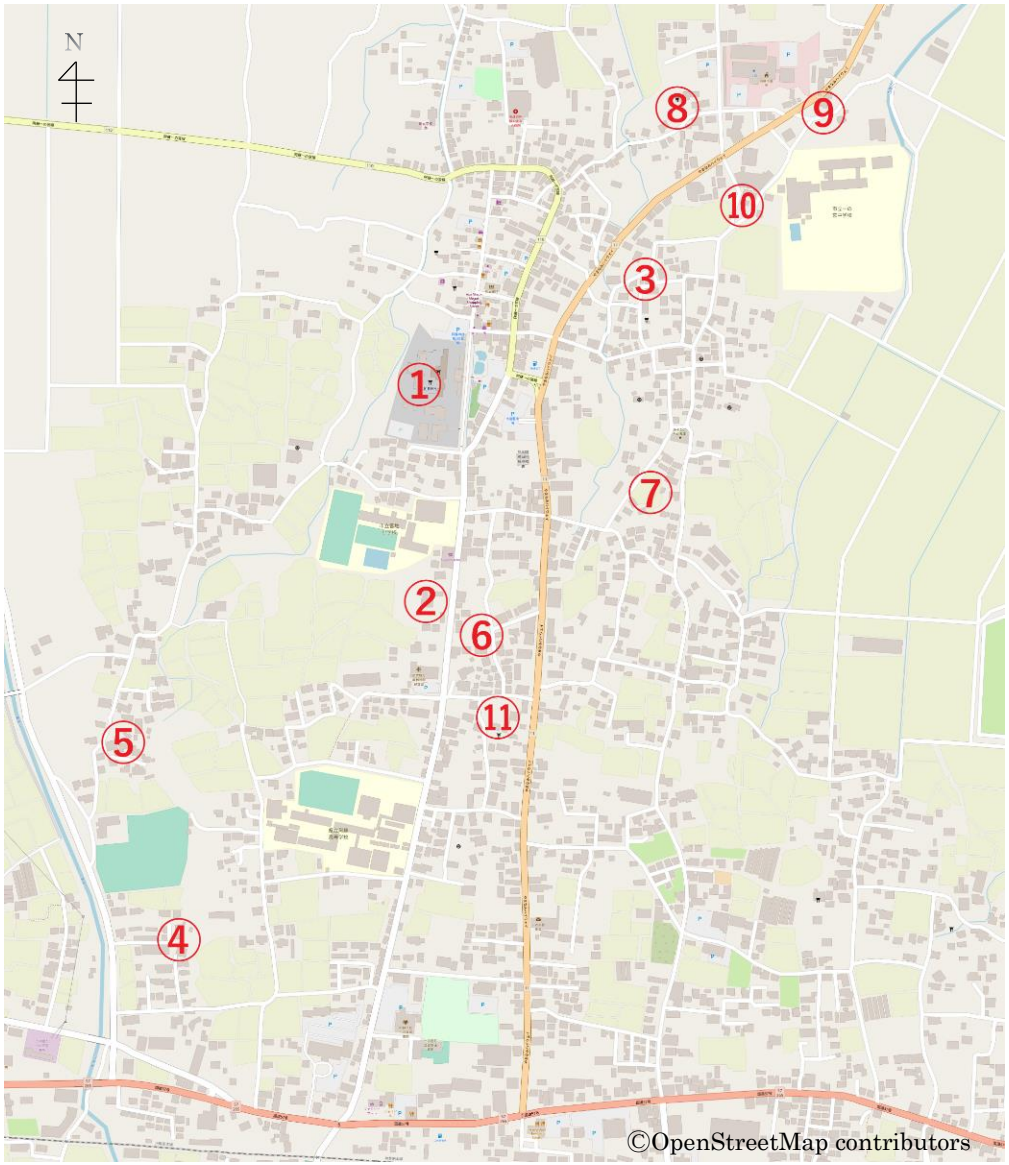
○「阿蘇の農耕祭事」関係神社位置図



① 阿蘇神社
② 国造神社
③ 霜神社
④ 吉松宮
⑤ 濱(はま)神社
⑥ 山下
⑦ 渋川
⑧ 蔵原公民館
⑨ 竹原公民館
⑩ 薬師堂
⑪ 風宮(手野)
⑫ 国造神社の御仮屋(おかりや)

国土地理院地図を加工して作成

図 4　阿蘇の農耕祭事関係位置図



① 阿蘇神社
② 宮司家
③ 歳禰(としね)神社
④ 塩井神社
⑤ 白粧原(けしょうばる)
⑥ 血原(ちばる)
⑦ 林田
⑧ 風宮(宮地)
⑨ 阿蘇神社一の御仮屋(おかりや)
⑩ 阿蘇神社二の御仮屋
⑪ 田鶴原(たづわら)神社

図 5　阿蘇の農耕祭事関係位置図(宮地地区)

○「阿蘇の農耕祭事」に関する研究

「阿蘇の農耕祭事」に関する研究は、数が少なく、また概要的なものが多い。ことに国造神社の祭事に関しては、阿蘇神社に付随した説明が多く、詳細な記録がほとんどない。また、阿蘇神社の祭事に関しても個々を研究対象としたものが多く、中世文書を中心とした文献解読がほとんどである。一方、霜神社における火焚神事については、ある程度調査の記録等はあるものの、研究・考察が十分であるとは言えず、「阿蘇の農耕祭事」全体についての研究は途上であるといえる。

以下では、農耕祭事全体に言及した主な研究等の概要をまとめる。

（1）神道文化会「高千穂・阿蘇」

昭和 31(1956)年に行われた、神道文化会の主催による高千穂及び阿蘇地方の総合学術調査を元に作成された報告書であり、各調査員の分野は考古学、宗教、芸能、歴史、言語、民俗、民家、美術に及ぶ。内、以下が阿蘇神社の農耕祭事に言及している。

「阿蘇神社の祭祀形態(桜井勝之進氏)」では、中世・近世・近代の古文書を元に各祭事の原型を紐解いており、特に祭事における各社家の役割に重点を置いて記述している。「阿蘇神社の御田植祭(本田安次氏)」では、農耕祭事の芸能に注目したものとなっており、田歌を中心に述べている。「高千穂・阿蘇の民俗学的調査(井之口章次氏)」では、阿蘇市一の宮町を中心に行った聞き取り調査を元に阿蘇の年中行事についてまとめており、農業従事者と祭事との関係の一端をうかがい知ることが出来る。

このように、各祭事に関しては概要的な内容しか知ることができないが、昭和 31 年当時の農耕祭事と現在の変遷をたどる一つの指標となる資料となっている。

（2）一の宮町文化財調査報告「阿蘇の農耕祭事」

昭和 57(1982)年に「阿蘇の農耕祭事」が国の無形民俗文化財に指定されたことを受けて、民俗文化財地域伝承活動事業(国庫補助事業)の一環として実施された調査で、指定対象となっている祭事を概要的に網羅している。昭和 57 年・58 年の 2 年間にわたり現地調査が実施され、それを元に安田宗生氏が民俗的な側面、古川周平氏が芸能的側面から各祭事について記述している。特徴的なのは、各祭事の芸能的側面からの視点があること、資料として個人が所蔵している御田歌や祭事の解説等をメモ書きも含めて原稿化しているところである。

国造神社の祭事についての記述は非常に少ないが、全体的に各祭事を網羅しており、他の文献との相違も見られ、変遷・比較に係る重要な資料となっている。

（3）村崎真智子氏著「阿蘇神社祭祀の研究」

昭和 62(1987)年から平成 2(1990)年までの現地調査を元に書かれた詳細な記録とともに、中世から近現代までの文献や地元での伝承等の聞き取り調査を踏まえて民俗学的視点から各農耕祭事を考察している。著書名は阿蘇神社祭祀とあるが、国造神社の諸祭事や霜神社の火焚(ひたき)神事についても調査・分析がなされている。

村崎氏による詳細な記録は、この 30 年でどのように祭事が変化してきたか等、細かい部分の比較ができる。また、各祭事を執行するための神社関係者及び氏子による組織や進め方などの記録もあり、神社に関係する組織の形態の変遷等も追える内容となっている。筆者の力不足で今回の調査では氏子や神社関係者への聞き取りができておらず、上記の変化を比較できていない。

この他にも、阿蘇地域や近隣はもちろん全国の事例も多く収集・比較し、御前迎え(若木迎え)や御田植式（ノロうち)、風祭、眠り流し(ネムリナガシ)など農耕祭事に関わる多くの要素を考察している。

残念ながら、著者である村崎氏は平成 18 年にご逝去されている。本来であれば、本書を作成するにあたっても村崎氏の助言をいただきたいところであった。

（4）佐藤征子氏著「一の宮町史　自然と文化 阿蘇選書⑪　神々と祭の姿」

全 12 巻で構成される一の宮町史の一つで、佐藤征子氏が平成 10(1998)年の調査を元にまとめ、民俗学的な視点で農耕祭事を網羅している。ページ数の制限もあり、祭事そのものの記録は簡単に述べているが、他地域の祭りとの比較から各祭事の解釈をしており、一般向けのよりわかりやすい内容となっている。

以降の記述において上記の文献を参照する場合、以下のように表記する。

（1）神道文化会(1960)

（2）一の宮町(1984)

（3）村崎氏(1993)

また、複数の文献を参照する場合は、「過去の記録」と表記する。

○令和２年「阿蘇の農耕祭事」の記録

１．阿蘇神社の踏歌節会（とうかのせちえ）

旧暦１月 13 日に行われる、御田歌（おんだうた）の歌い初めである。御田祭りの神輿（みこし）の担ぎ手である駕輿丁（かよちょう）が、阿蘇神社と宮司宅で決められた歌を歌う。この日まで御田歌を歌ってはいけないといわれている。

【踏歌節会の行程】
日時：令和２年２月６日　11：00～
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

11：00　阿蘇神社の仮拝殿に神職４名が入殿する。開始の太鼓。
参列者は神職６名、氏子会会長、御田歌保存会会長、駕輿丁 43 名。
ほとんどの参列者が普段着だが、玉串を奉納する人や役持ちはスーツ。
祭壇正面は金幣（きんぺい）3 つと神酒２つ。左手神職近くに大麻（おおぬさ）。
修祓（しゅばつ）の儀。神職 A が大麻の前で祓詞、神職 B がその大麻で神職・参列者の順にお清め。
斎主（さいしゅ）(宮司)一拝。
献饌（けんせん）。後列の神職２名が笙（しょう）等を奏する。その間、神職 A が神酒の蓋（ふた）を開ける。
祝詞奏上。
玉串拝礼。神職全員(6 名)で祭壇へ、宮司が奉納。その後、以下順で玉串を奉納。
氏子会会長、御田歌保存会会長、召立（めしたて）役代表、駕輿丁代表(四の輿)、区長代表(西３区)、地区総代代表
この間、楽奏あり。
神職 A が撤饌（てっせん）。斎主一拝。

11：20 頃　神事終了。各自椅子を片付けて祭壇前に集まる。
駕輿丁らが「正月殿（しょうがつどの）」を歌う。神職は座ったまま着く。

11：30　終了の太鼓、一同一礼で終了。各自宮司宅へ移動。

11：40　宮司宅の座敷に入る。会長(御田歌保存会長か)挨拶（あいさつ）。
宮司による新年の挨拶。挨拶後、お茶が出る。

11：50　「御所鶏（ごしょにわとり）」を歌う。歌い初めに合図はなく、おそらく会長から歌い始める。
歌い終了後、饅頭のふるまい。しばらくしてまた阿蘇神社へ移動。

12：20　阿蘇神社斎館（さいかん）に到着、座敷で直会（なおらい）。一部は移動途中で分れて地区ごとの直会に行く。
氏子会長挨拶、神職 C による復旧工事の説明。
直会途中でほとんどの人が地区ごとの直会のために抜ける。
直会の内容は、酒・お茶・からあげ等軽食・パン・おつまみ等。

13：30 頃　万歳三唱で終了。

【御田歌について】

以下に聞き取り内容を記す。

〇御田歌全体について

・歌は地区ごと(輿(こし)ごと)に練習する。

・一人で歌えるようになったら一人前という。

・10 年前に特訓した時の先生は 4 名くらいいた。

・節(メロディー)は 4 つのみ。ただ、昔は輿ごとに節(ふし)が異なったりしたという。今は統一している。先にメロディーを覚えるといい。歌えない人はハミングで参加するという。

・地区(輿)ごとに練習すると年々節がずれたりして歌いにくくなっていたため、これまでもある一定の期間ごとに全体を合わせて節を統一している。一の輿、二の輿は十数年前に阿蘇神社主体で音声記録を録った際に節のすり合わせをしている。

・ヒキホヘイは、ホへの中で息を引くような歌い方があるのが本来の形だが、歌える先生が皆亡くなってしまい、現在歌える人間がいなくなっている。

〇一の輿

・一の輿は分(わかれ)区、西区、塩塚からなる。3 行政区からなるため、練習になかなか人が集まらない。御田祭前の 4～5 日間しか練習していない。

・地区総代代表への聞き取りによると、塩塚区では区の中でも分かれて練習している。

〇二の輿

・二の輿は東区からなる。練習場所は柿の木公民館。御田祭前の 4～5 日間に練習。柄漏流(えもりなが)しの前に 1 回練習する。

〇三の輿

御田歌保存会副会長聞き取り

・18 歳から歌を始めて今年で 50 年になる。

・三の輿は町区からなる。練習場所は町区公民館(矢村社隣)。踏歌節会(とうかせちえ)前に 2 日、御田祭前に 3 日、柄漏流し前に 2 日練習する。毎回 12～13 名参加。

・三の輿は担ぎ手が不足して神輿(みこし)を出せない時期があった。その時期は古神(こかみ)区が神輿を出していたという。それではいけないということで、人を増やしていった。現在は若い人が入ってきていてそのころよりも人が集まっている。中間の世代がいない。

〇四の輿

召立(めしたて)役聞き取り

・四の輿は北区からなる。練習場所は北区公民館(市役所裏)。踏歌節会前はなし、御田祭前に 2 日くらい、柄漏流し前に 1 日練習をする。

・歌には小学生の頃から参加している。20 代の頃は担ぎ手がいないという問題があった。

【他記録との相違】

・神事そのものの流れは過去の記録から変更なし。

・歌については以下の通り。

「正月殿」

正月殿にまいる　○門の松が高い　〈クマノブシ〉

高いこそえい

○徳のかさのまつ　門に立ったもせん

○袋持ったもせん　餅持ったもせん

○酒持ったもせん　太鼓打ったもせん　〈ヒキホヘイ/ハカマタツ〉

○笛吹いたもせん　神楽舞うたもせん

○鈴振ったもせん　莚敷いたもせん

○獅子舞うたもせん

☆鶴舞へえい　☆亀舞へえい　☆鶴千年　☆亀万年　〈ホーヘンヤ〉

「御所鶏」　〈コギリ/オヤシキ〉

はられはられと謡へや

○御所の鶏　御所はどの御所　南の

○御所の庭鶏　御所ははばかり　小坪で

○謡へ庭鶏　御所の庭鶏　音を出し

○かねてくぐめく

○＝ホヘ

☆＝ホーヘンヤ

２．国造神社の踏歌節会

旧暦１月 16 日に行われる。地元では「歌い初め」ともいう。御田祭りの神輿の担ぎ手である駕輿丁が、国造神社で歌う。この日まで御田歌を歌ってはいけないといわれている。

【踏歌節会の行程】

日時：令和２年２月９日　14：00～

開始場所：国造神社拝殿

14：00 前　　社務所に集まりだす。時間になったら神饌を持って拝殿に移動。
神饌は左から野菜(ナス・トマト・葉物野菜)、神酒・塩、米、乾物(昆布・いりこ・干しあわび)、果物(バナナ・みかん・リンゴ)。
神職１名(宮司)、氏子他 21 名。拝殿には莫座を敷く。

14：00　　神職（宮司）によるの挨拶、一礼。
修祓の祓詞、清めの祓い、献饌、祝詞奏上。
玉串拝礼、総代会代表、駕輿丁代表(今年は代理で前頭)
歌い初め、「田の神」。前頭から歌い始める。

14：15　　「正月殿」の歌い。

14：20　　「楽納め」の歌い。
二礼二拍手一拝で終わる。撤饌。
片付け、移動

14：30 ごろ　社務所に移動して直会。

16：00 ごろ　解散

【御田歌について】

以下に聞き取り内容を記す。

・駕輿丁は東手野 10 名、西手野 10 名、尾籠5 名の計 25 名からなる。この人数が変動することはない。

・歌い方としては、東手野と尾籠が似ているが、やはり地域差が出ている。

・西手野の御田歌の練習は計 11 日間。「御田祭り」前が 5 日、祭り本番をはさみ、「眠り流し」前に 6 日。

・色を付けて歌いあげるのが特徴。阿蘇神社よりも抑揚があり、メロディアスに歌われる。

【他記録との相違】

・かつては前と後とで掛け合いながら歌っており、前後は東手野と西手野が交代して請け負っていたが、ここ 20 年程は掛け合いもなく、一緒に歌っている。

・踏歌節会(とうかせちえ)における歌の歌詞については以下の通り。

「田の神」(七ツユリ)

一つ謡ひて　　此所(こ)の田の神に参らせう(しょう)　　神も叡覧(えいらん)　　田主も植えて歓(よろこ)ぶ

「正月殿」

(クマノ)正月殿に参る　　門の松は高い

(ミツヘイ)高いこそえ　　徳のかさの松

(奉ヘンヤ)ほーへんやつるはえ　　ほーへんやかめまえ

ほーへんやつる千年　　ほーへんやかめ万年

「楽納め」

阿蘇に住みたや　　坂梨越えて宮地に　　宮地名所のお宮に　　楽はたえせぬ

「正月殿」については、過去の記録で記述のあった「袋持ったも先祖（せん）～」の部分が省略されている(歌わなくなった可能性あり)。今後聞き取り調査の必要あり。

３．阿蘇神社の田作祭

阿蘇神社の春祭りは、3 月の初卯から後卯までの 13 日間執り行われる卯の祭、卯の祭期間中の巳の日から亥の日までの 7 日間の田作祭がある。卯の祭の期間中、毎日阿蘇神社で神事と阿蘇古代神楽が奏上される。田作祭は、一の宮町宮地の陣の町地区にある歳禰神社の祭神である歳神に関連する祭りで、巳の日「横莚神事」、申の日「御前迎え」、亥の日「田作神事」の他、各旧社家宅での「宅祭り」が行われる。一連の祭事は、かつては社家だけで行う祭りであった。

３－１．横莚神事

3 月巳の日に行われる。阿蘇神社から歳禰神社へ神幸し、歳禰神(国龍神)を神輿に遷座する。この日から神輿は阿蘇神社斎館や旧社家を廻り、宅祭りが行われる。

【横莚神事の行程】
日時：令和 2 年 3 月 15 日（日）　14：30 ごろ
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

（神事）
14:40 ごろ　参列者は神職 3 名と駕輿丁2 名。
祓詞奏上、神輿・太刀・金幣の祓い、駕輿丁祓いと簡単な神事。
14: 50 ごろ　神輿を神職が下ろして駕輿丁が担いで神幸。行列は神職Ａ(太刀)・神職Ｂ(金幣)・神輿・神職Ｃ(提灯)の順。道順については図 6 参照。
（横莚神事）
15:05 ごろ　歳禰神社到着。神社では陣の町の氏子が出迎え。行列は神輿を本殿前に下ろし、神職Ｃのみ中に入り、神職Ａ・Ｂ2 名は本殿両脇の広縁で何事かする。その後神職全員が中へ入る。本殿の中は幕があり見えない。
大祓詞奏上。神職全員が白マスクをして神輿を開け警蹕しながら御神体を神輿に遷座。神事後はマスクを取る。神殿の神酒を取り、氏子の 1 人に持たせ、新しい神酒は神輿に載せる。
15:20　駕輿丁が神輿を担いで氏子らと一緒に移動、隣の畑(祭場)へ。
15:25　大祓、祝詞、二礼二拍手一拝、一拝の簡単な神事。その間、神職Ｃの提灯は氏子が持つ。神事の後、神輿の神酒を氏子へ渡す。
15:30 ごろ　祭場から歳禰神社の前を通り元の道順で阿蘇神社へ。行列は行きと同じ順番。
15:40 ごろ　神社斎館に到着。斎館座敷に神饌が用意されており、神輿も斎館に納める。
（宅祭り）
15:50　神職Ａが祝詞。大麻で神饌、神職Ｃ、神職Ｂ、駕輿丁 2 名の順に清める。
15:55　宅祭りの宣告。神職 3 名が神輿に向かい二礼二拍手一拝、献饌。　神饌は左から野菜(キャベツ・ナス・トマト)、神酒、米、魚、果物(リンゴ・ブドウ・イチゴ)。

16:00　奉幣の儀。神職Ｂが行う。神輿の前に大型の御幣を供える。その後、神輿の前で神職 3 名が大祓詞、神職 C が祝詞奏上。

16:15　駕輿丁が神職に汁碗(高菜の味噌汁)と酒を持ってきて酌をする。二献目は漬物(沢庵)、三献目は味噌田楽串(豆腐)。その後神職一時退場、撤饌。
神職 3 名が神輿前で列座列拝。宅祭りとりおさめの宣告。

16: 40 ごろ阿蘇古代神楽開始。

〈榊舞〉左手に榊、右手に鈴を持って舞う。舞手は神職Ｃ。神職Ｂが太鼓、神職Ａが横笛、駕輿丁が銅拍子を奏する。

〈折敷舞〉左手に米(神饌のもの)の乗った折敷、右手に鈴を持って舞う。舞手は神職Ｂに交代。神職Ｃが代わりに太鼓を奏する。舞の最後に米を神輿に向かってまく。

〈剣舞〉太刀とは別に鍔なしの刀(脇差)を持って舞う。舞手は神職Ａ。横笛を神職Ｂと代わる。

〈幣舞〉奉納した御幣とは別の小さめの御幣を持って舞う。舞手・楽団は役変わらず。幣舞の後、舞の御幣で全員のお清めをする。

【聞き取り他】

(横莚神事)

・歳禰神社横の祭場について、畑地になっているが、普段は田畑として使用しており、この神事のためにこの期間のみ場所を空けている。持ち主は陣の町の氏子。

・駕輿丁はその日の朝、氏子青年から 2 名が任命された。

(宅祭り)

・神職Ｃが神輿前に行く時は茣蓙が敷かれる。

・神職Ｂによると、三献三度の時は一つの食事に対して 3 回酌を受けるが、その 3 回で一合飲んでしまうのが通常だという。

・阿蘇古代神楽は全て素面で舞い、楽の調子は同じで、ほぼすべての舞が足の運びはほぼ同じ。採物は御幣、太刀ともに神楽専用のもの。米は神饌のものをそのまま使用する。

※2020 年時点の宅祭り。

15 日　阿蘇神社斎館

16 日　旧社家宅(中町)

17 日　斎館

18 日　旧社家宅(下町)

19 日　神職 D 宅(社家)

20 日　斎館

【他記録との相違】

（横莚神事）

・村崎氏(1993)では、祭場での神事の際、神輿が歳禰神社の方向を向いているという記述があるが、今回の調査では正確にはほぼ南を向いており、歳禰神社の方向を向いてはいない。

・陣の町氏子へのお神酒の注ぎはなし。

（宅祭り）

・神社の斎館で夕祭りをする際は直会なし。また、全体的に昼祭りも執り行わなくなっている。斎館でも社家でも行うのは朝祭りと夕祭りのみである。

・宅祭りをしてくれる社家は減少しており、現在は 3 宅のみ。御前迎えの日の宅祭り先である旧社家宅(下町)及び翌日の神職 D 宅のみが日にちが固定されている。

写真 1	横莚神事 歳禰神社横の祭場での神事の様子	
写真 2	宅祭り 阿蘇神社斎館での宅祭りの様子	

図 6　横莚神事神幸行列行程図

３－２．御前迎え

3 月申の日に行われる。歳神の妃神を迎える一連の神事で、吉松宮を起点に決められた場所で坂迎(酒迎。帰参する行列を出迎えて供応すること)を受けながら阿蘇神社へ向かい、歳神との神婚の儀を行う。火振りで観光的に有名となった。

【御前迎え行程】

日時：令和 2 年 3 月 18 日　8：00 ごろ

開始場所：阿蘇神社参道

※前日は神社斎館にて宅祭りを行う。

(誓文立)

8：00 ごろ行列が斎館から出てきて、そのまま参道に入る。行列は太刀(神職)・金幣(神職)・神輿・笏(斎主)の順。南側から入り、楼門のあったあたりから引き返す。南門守社から楼門の間を 7 回半廻る。南門守社の扉前に青竹(葉付き)に白紙を下げた誓文が立ててあり、その前に茣蓙が敷かれている。廻った後に行列は南門守社の前に立ち、斎主のみが茣蓙に座る。その他神職は神輿の両脇に立つ。南門守社への祝詞奏上、二礼二拍手一拝ののち、社の前の誓文を取り、別の神職 B(御前迎えの斎主)へ渡す。行列が拝殿に移動し、安置させた後神職 3 名は神輿の前へ行き、駕輿丁とともに一拝する。駕輿丁が拝殿を出て、神職のみが卯の祭りの神事を執り行う。

8：25　卯の祭りの開始。別で御前迎えの一行が出発の準備をする。軽ワゴンに神事に必要な物品と誓文を乗せて吉松宮へ出発する。もう 1 台の車に麻苧その他を乗せ、西町の薬師堂へ寄り、祭壇や弓矢の作成に必要な道具・材料を地元氏子へ渡す。

(吉松宮)

8：50　吉松宮着。もう 1 台は遅れて到着。氏子が境内に火を焚いて出迎える。神饌と御神体づくりに必要な道具は、氏子らが準備する。吉松宮拝殿での神饌の準備と誓文を本殿前に立てる行為は、すべて神職 2 名が行い、氏子らがこれを手伝うことはない。

9：00　祭壇の準備を終えると、拝殿の扉を閉めて神職 2 名のみで御神体を作る。拝殿窓は内側から幕を張って中が見えないようにしている。駕輿丁や氏子らは外で待機。

9：40　御神体を作り終え、氏子らと一緒に拝殿の片付けと神事の準備をする。

神饌は左から、果物(バナナ・みかん・リンゴ)、乾物(イリコ・阿蘇神社の御浄料)、神酒(米・塩)、野菜(人参・大根・ほうれん草)、菓子類の順。前段左から樽、藁に入った粢、酒(阿蘇神社が持ってきたもの)。両脇に御神体の入ったヒメゴゼの柴と御供の柴が立て掛けてある（神社ではこれらをまとめて土産柴という)。

9：50　神事開始。参列者は神社側 5 名と氏子 12 名。

斎主一拝、修祓、献饌、大祓、祝詞奏上、玉串拝礼（氏子青年会・警護団・総代・

組長・赤水区長・座元(参列者代表)の順)、撤饌、斎主一拝で終了。

10：10 ごろ拝殿にて直会準備。二つの柴作成で使用しなかった枝切れ等はそのまま境内で焚いている火にくべて燃やしてしまう。

10：20 ごろ直会開始。弁当とお茶。お弁当は、柴作りの間に持ってきている。

10：50　直会終了。全員が外に出て、柴担ぎが掲げたヒメゴゼの柴の下をくぐる。くぐる際は往復してくぐり、最後に柴の葉をちぎり取る。その後一行は車で移動。

（濱神社）

11：10　濱神社着。神饌・神酒以外はすでに氏子らによって整えられている。

11：15　神事開始。献饌、斎主祝詞奏上、参列者拝礼(濱神社総代)、撤饌で終了。参列者は総代、区長ら 4 名。その他氏子ら(多くが女性)は拝殿の外で待機する。
神饌は、左から果物(バナナ・リンゴ・みかん・パイナップル)、魚、神酒、野菜(葉物)、前列に米

11：20　直会の準備。氏子女性 2～3 名が拝殿に上がって、直会の酌をする。食事は吸い物・饅頭・小鉢 3 つ・煮物類・酒で、神社関係者のみが食べ、氏子総代や区長らは酒のみ。

11：40　直会終了。氏子らが柴の下を往復してくぐり、葉をちぎる。
神職 2 名がここから馬に乗り、鳥居をくぐって出発する。行列は前から樽持ち(車)、柴担ぎ 2 名、神職 A、神職 B(斎主)で、各馬に馬子がつく。

（山下）

12：10 ごろ旧道のさらに北側の里道を行き、司ホテルの裏から黒川線路沿いの旧道に入る。山下(H 家)に到着後、座敷にて神事・直会。

12：35　H 家が外に出て、庭先で柴くぐりと柴ちぎり。黒川部落の旧道を行き、阿蘇駅ロータリーを過ぎて、道の駅裏の道から渋川部落へ。

（渋川）

12：50 ごろ渋川着。F 家（渋川氏子か）が出迎える。庭先に机が設置され、そこに樽と柴を設置して神事を開始する。参列者は 7 名。

12：55　斎主祝詞奏上、家族拝礼をして神事終了。神饌や柴を家に上げて直会へ。

13：25　直会終了。F 家の庭にて柴をくぐり葉をちぎる。蔵原へ移動。トヨタレンタリースの横の歩道から国道下をくぐり、医療センターに隣接した小道を通って市道(上西黒川西町線)に出て、蔵原公民館へ。

（蔵原）

13：50　蔵原公民館着。祭壇が整い次第、神事。斎主祝詞奏上、二礼二拍手一拝、代表拝礼。参列者は区長を含めた氏子 7 名。代表拝礼をその場で決めていたため、座元は特にいないようである。祭壇へは両脇に柴、樽、神酒(徳利)、赤飯(お重)、 粢、粢入りの藁、酒(阿蘇神社用意)。

13：55　直会開始。食事は事前に区の方が用意。食事には卵椀、小豆飯のおにぎり、刺身、煮物が出る。

14：20　直会終了。公民館の中で柴をくぐり、葉をちぎる。

14：25　公民館を出発。竹原へ行く。

（竹原）

14：40　竹原公民館着。氏子らが外で出迎える。

神事開始。斎主祝詞、竹原区代表拝礼、二礼二拍手一拝で終了。参列は氏子 10 名。直会を準備している女性らはこれには参加しない。

14：45　直会開始。食事は巻きずし弁当、おはぎ、おかし、汁物(みそ仕立て)。

15：05　直会終了。給仕の女性含め全員が外に出て、公民館駐車場で柴をくぐり、葉をちぎる。

（薬師堂）

15:20 ごろ西町薬師堂着。祭壇の準備。青竹で作った弓矢を同じく青竹で作られた祭壇に置く。その周りを細い青竹 4 本で囲い、注連縄を張る。その両脇に柴を置く。神饌は、バナナ、ミカン、リンゴ、米、イリコ、塩、神酒、粢、昆布、樽、酒。祭壇は東を向く。

神事開始。斎主祝詞奏上、竹原代表拝礼の簡単な神事。参列者は氏子 10 名で全員男性。

15：30　直会開始。食事は刺身、寿司類、酒他で小料理無し。

15：55　直会終了。薬師堂入口付近で柴をくぐり、葉をちぎる。ここから祭壇に置かれていた弓矢を一組ずつ柴担ぎが持って移動する。途中、柴の葉をもらいに氏子が道沿いで待つ。

16：25　東岳川橋を過ぎ、市道(東岳川線)を渡り切ったところで神職は馬を降りる。ここで馬は帰る。近くの家で休憩する(阿蘇神社職員の自宅)。この休憩は、数年前から取り入れたもの。

16：50　全員徒歩で塩井神社へ。樽持ちのみ先に車を神社参道入口に回す。

（嫁さんの禊ぎ）

17:00 ごろ塩井神社着。氏子 10 名が出迎える。神職は参道入口に車を付けて狩衣に着替える。

神職 2 名が白マスクをしてから神社横の白布の囲いへ入る。柴を一つずつお清めする。囲いの中にはバケツと柄杓、紙縒が置いてある。お清め中は警蹕。この間、氏子、柴担ぎ、樽持ち全員が外で待つ。

17：10　「嫁さんの禊ぎ」終了。全員が神社本殿に入って神事開始。修祓、祝詞、榊で祭壇・氏子の順でお清め。斎主祝詞奏上、玉串拝礼（斎主、塩井川代表の順）で終了。

直会開始。食事は吸い物・汁物。吸い物椀(鶉・麸・水菜)は蓋つきの作り置き。汁物(豆腐・かまぼこ・ちくわ)は鍋から注ぐ。

17：30　塩井神社外で柴をくぐり葉をちぎる。ここから神職 B が提灯を持っていく。提灯は LED。白粧原の S 家へ。

（白粧原）

17：40　途中、S 家畑で、S 家当主らが提灯を持って出迎え。日が落ちてきて少し薄暗い。藪の小道を抜けて座元となっている S 宅へ。座敷床の間に祭壇を作る。藁から粢を出

す。

神職 2 名が白マスクをして神事開始。

フスマが閉められ、化粧(けしょう)の儀。このとき電気が消される。参列者は座元である S 家をはじめとした男性ばかりで、6～7 名。子供も参加。警蹕(けいひつ)が聞こえる。3 分程で警蹕を終え、フスマが開かれる。

17：55　修祓(しゅばつ)の儀。榊で祭壇、斎主、S 家当主ら、その他の順で清める。大祓詞、斎主祝詞(さいしゅ)。斎主及び座元当主による玉串拝礼で終了。直会へ。汁物はゴボウと白身クジラが入っている。座敷で神職と当主らが輪になって食べる。その他柴担(しばかた)ぎや参列者は手前の座敷で食べる。

18：45　直会終了。S 家の家族らも外に出て、柴をくぐり葉をちぎる。庭で松明(茅(かや)を束ねたもの)２つに火を点け、提灯にも火を点す。座元が提灯を持ち、その他 S 家の人が松明を持っている。松明が短くなってきたら、手持ちの他の松明に火を移し、燃えカスの松明は道端に捨てる。おそらく以前は柴担ぎと神職が分かれて神幸したあたりで、S 家当主らと別れる。S 家の若い人間と樽持(たるも)ちで松明を持つ。

宮地小学校横で爆竹が上がり、待ち構えている別の警護団２名に松明の火が渡される。爆竹を合図に火振りが開始する。

（神婚の儀）

19：05 ごろ阿蘇神社拝殿着。現在楼門が復旧工事中のため、拝殿入口の左側に「迎え女郎」が立てられている。見学客も多いせいか、迎え女郎の説明書きがある。拝殿では宮司他神職数名がおり、一行を出迎える。神輿が拝殿中央に安置されており、柴担(しばかた)ぎが持っていた柴と弓矢二組をそれぞれ神輿の両脇に立てる。

神職 3 名が白マスクを着けて大きな赤傘を広げ、衣替えをする。この間警蹕、6 分程度で終了する。

電気がつき、赤傘が畳(たた)まれる。

宮司祝詞奏上

19：20　神輿が出発する。白丁姿の子供 2 名が神灯を持って行列に参加する。ここからの行列の神職は、朝の誓文立(せいもんたて)の人間となる。柴担ぎとは別に駕輿丁がおり、その 2 名に神職らが神輿を降ろして担がせる。出発に際して爆竹が鳴らされる。

行列は、白丁(神灯)、神職(太刀)、神職(金幣(きんぺい))、柴担ぎ、神輿、神職(斎主)、警護団(松明)の順。宮司をはじめ他の神職は南鳥居前で見送りして別れる。

（血原(ちばる)）

19：30 ごろ血原着。鳥居はなく、青竹に注連縄(しめなわ)を張ったものが立てられている。この境界は、奥の石造物(神木か)まで伸びているが、暗くて全容は見えない。血原までの道は里道で、民地の中を通っていく。神輿(みこし)は入口を向き、斎主は神輿（北）を向いて神事を行う。大祓(おおはらえ)、祝詞奏上の簡単な神事を終えると、里道を通り林田へ。

（左弓(ひだりゆみ)）

19：55　林田に着くと神職が的石の大体の位置を確認後、的石に向って左手で弓を引く左弓で矢を射る。暗いため、的石は見えない。中々飛ばないため、振りだけで腕の力で

投げることもある。この左弓を待つ人はおらず、氏子や見学もない。

途中の角から一切しゃべらず、歳禰(としね)神社の左の道を通って行く。歳禰神社をすぎた途中の角からおしゃべりが OK となる。

20：10 ごろ賽木(さいのき)着。北西の方向へ左弓で射る。ここでは火振りで集まった参道の見学者や氏子らが多く、皆競って矢を拾う。射た後の弓も近くの人にあげる。ここで警護団は別れ、氏子青年団が松明を持っていく。

（宅(たく)祭り）

20：20　旧社家宅(下町)へ着。宅祭りへ。この夜から宅祭りに「笏(しゃく)」の神事が追加される。これは、この日から宅祭りで柴が神輿と一緒に祀られるからである。

笏の神事については、宅祭り及び祭り揚げ参照。

【聞き取り他】

・現在は神職 2 名、柴担(しばかた)ぎ(氏子青年団)2 名、樽(たる)持ち(警護団)1 名で構成されているが、以前の樽持ちは 2 名来ていた。警護団の人数が減少しており(2020 年 3 月時点で 9 名)、負担減のため人数が減ったという。

・ヒメゴゼの柴や御供(おとも)の柴に使用される材料はカシの木、ミツマタ、カズラ。吉松宮氏子によると、ミツマタが本体(御神体)ではないかとのこと。実際、外から見えるのはカシの葉と束ねて肩に掛ける部分のカズラのみ。用意するのは吉松宮氏子で、カシの木は吉松宮周辺のものだが、カズラとミツマタは周辺にはなかなかなく、他所から取ってくるという。

・神職が乗る馬については、昔は様々な部落から奉納されていたが、公道を行くということもあって馬を出す部落が年々減ってきており、最近では坂梨(町古閑牧野)が続いている。

・山下部落の H 家は元々大牟田出身で、座元を引き受けて 60 年が経つ。先代が引き受け、その息子夫婦が引き継いでいる。

・神婚の儀の後から行列に参加する白丁は、今年は 2 名とも小学 4 年生。毎年、小～中学生の男の子に頼んでいる。

【他記録との相違】

・吉松宮氏子らによる直会は、以前は座元の家で行っていたが、氏子の高齢化や時間を取られることを理由に、5 年ほど前から拝殿による簡単な直会になった。

・竹原の坂迎について、以前は座元を輪番でしていたが、現在は公民館で行っている。地元への聞き取りでも輪番でしていたのは大昔という記憶だったため、公民館で行うようになったのは最近ではないことがわかる。今後聞き取りが必要。

・馬について、村崎氏(1993)の調査時は白粧原(けしょうばる)の先(おそらくは阿蘇神社)まで行っていたようだが、現在は東岳川橋付近で帰している。

・塩井神社そばの塩井川ほとりでの火焚きがなくなっている。氏子の方に尋ねたが、火を焚いた記憶はないという。このことから、火を焚かなくなって久しいことがわかる。また、ここか

ら松明を持つようになっていたが、提灯のみになっている。青竹の棚も白布の囲いの中一つのみとなっている。現状、塩井川はほとんど枯れており、川の跡が残るのみである（水無川か)。
・以前はS家における神事では神事全てが非公開だったが、現在は化粧の儀のときのみフスマが閉められる。
・座元であるS家を出てから極楽寺前を通るまでに柴担(しばかた)ぎのみ別の道（明神道）を行っていたが、現在は行っていない。ただ、座元当主は「ここから小道があった」旨を語っていたため、記憶としては残っているようである。今後聞き取りが必要。
・楼門及び拝殿が復旧工事中のため、神事は仮拝殿で行われている。楼門に立てられていた「迎え女郎」は拝殿入口に立てられ、神婚の儀で広げていた左右の紅白幕は張られず、仮拝殿向かって左の白幕のみで儀式を執り行う。また、村崎氏(1993)の調査時は点けられていた電灯が、今年は消されており、神輿そばの燈明のみの明かりで儀式を行っている。これは、村崎氏(1993)調査以前の形式に戻っている。無灯火における神事が仮拝殿においてのみなのかどうか、今後の継続調査が必要である。神社職員によると、元の拝殿では神輿を安置している場所が参列者の目線より高いところにあり、電気を消す必要がなかったのではとのこと。
・今年は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、商工会による火振り体験がなく、境内で氏子のみで行われた。また、同様の理由で各地区の直会において献杯(けんぱい)がなかった。

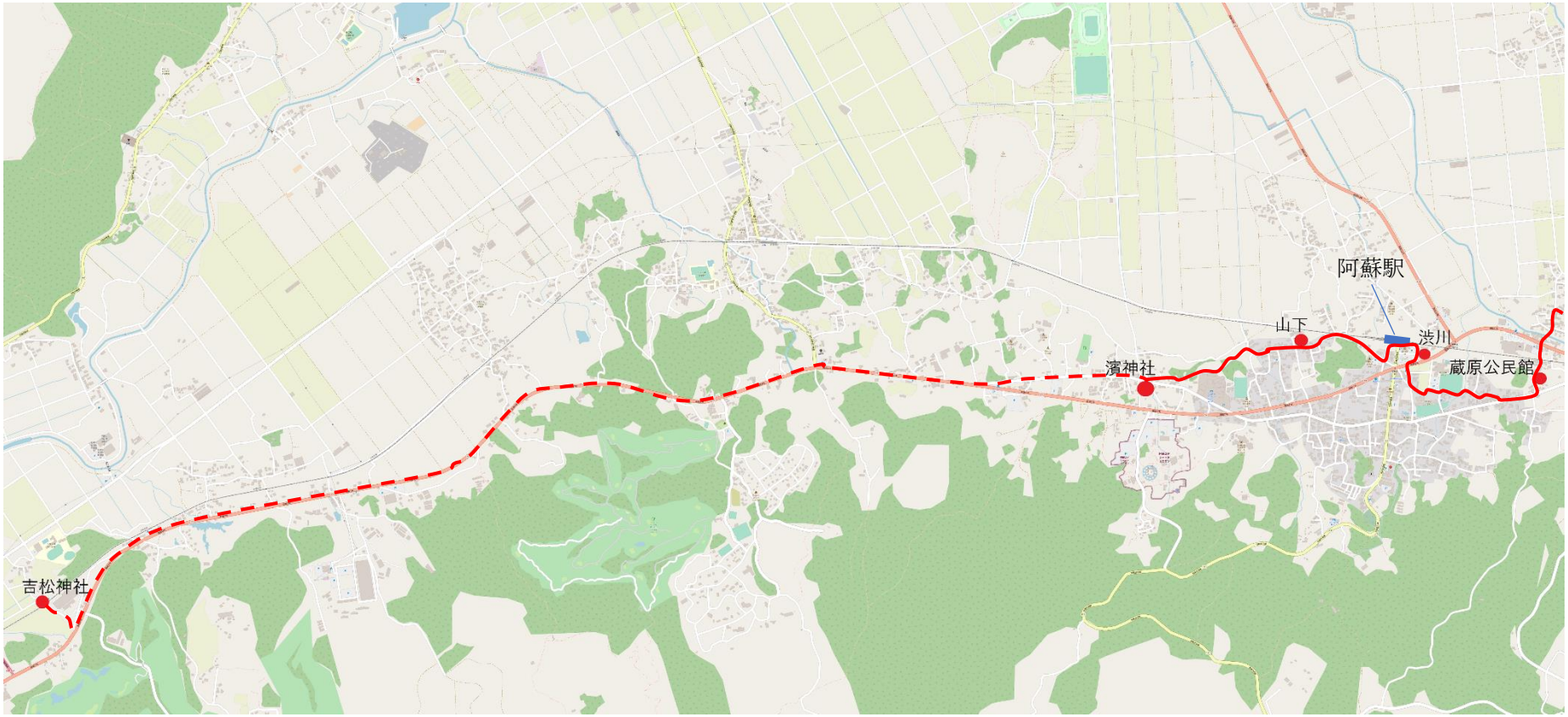


図７　御前迎え行程 1(吉松宮～蔵原公民館間)

地図凡例
車移動
徒歩移動

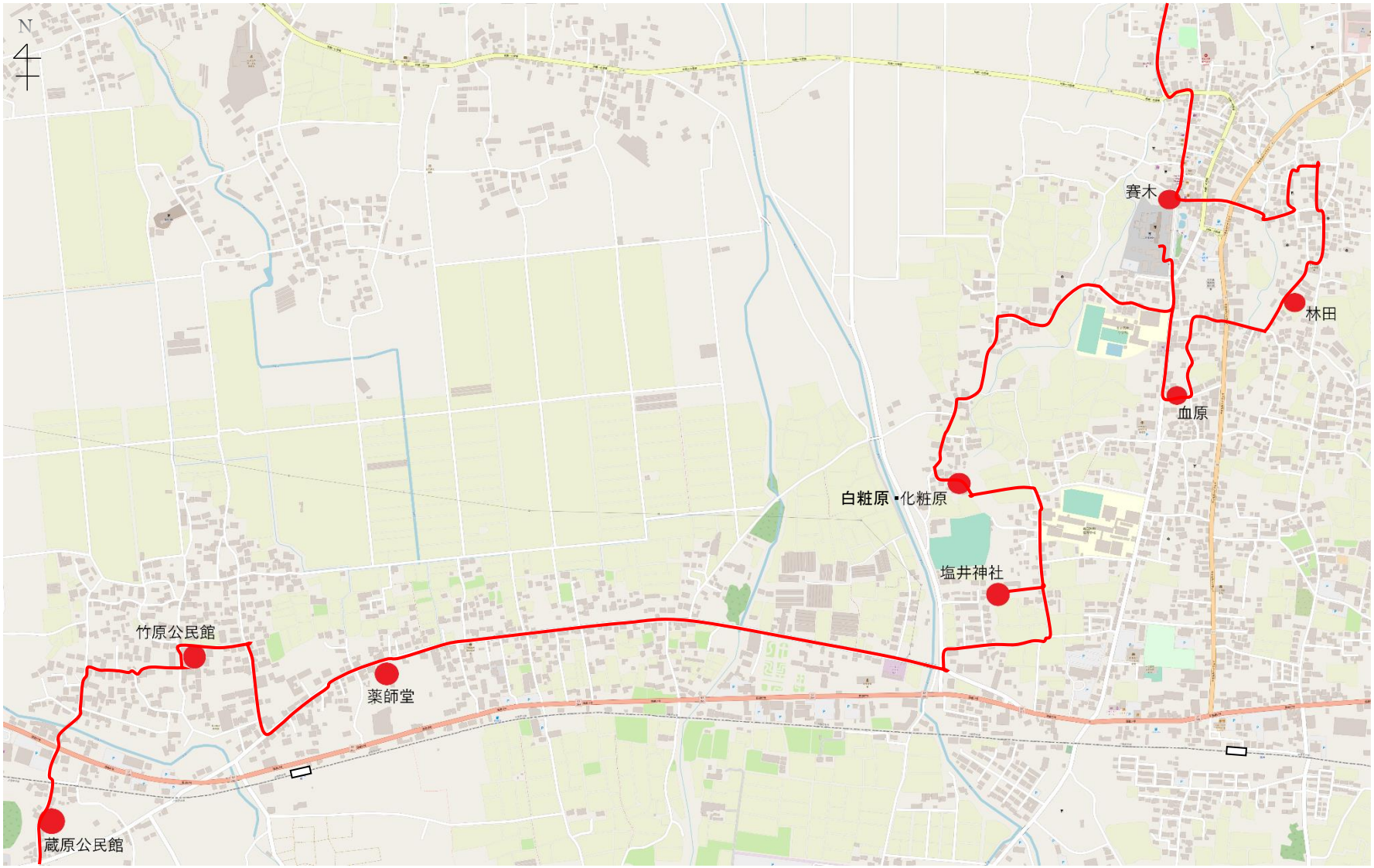


図 8　御前迎え行程 2(竹原公民館～賽木間)

写真 3	誓文立（せいもんたて） 南門守社における誓文立の神事の様子	
写真 4	吉松（よしまつ）宮 吉松宮境内における柴くぐりの様子	
写真 5	薬師堂 西町薬師堂境内に設置された、青竹でできた祭壇 同じく青竹でできた弓矢が置かれている	
写真 6	塩井神社 塩井神社境内における「嫁さんの禊（みそ）ぎ」の様子	
写真 7	神婚の儀 阿蘇神社拝殿における神婚の儀の様子 赤い大傘で目隠しをして御神体の衣替えをする	

３－３．宅祭り

社家とは、阿蘇神社のかつての司祭者集団であり、現在でも様々な神事において重要な役割を担っている。元来田作祭の主体は社家であり、その名残として田作祭の期間中は宅祭りが執り行われている。残念ながら旧社家は時代を経るごとに減少しており、宅祭りを受ける旧社家も三家のみとなっている。今回はその中でも 3 月酉の日に行われる、旧社家出身である神職 D 宅における宅祭りを調査した。

【宅祭り行程】
日時：令和 2 年 3 月 19 日　17：10 ごろ
開始場所：旧社家宅

玄関前に「迎え女郎」が立てられており、これを囲うように青竹三本の頭を括り、白紙を下げている。

（神事）

17：15 ごろ献饌。神職 B・C が行う。このとき神職 D(旧社家の神職)が笛を奏す。
奥座敷のみ欄間部分を注連縄で囲う。神饌は左から野菜(トマト・タケノコ・しめじ)、酒、米、魚(鯛)、果物(バナナ・リンゴ・イチゴ)

17：25　奉幣の儀。御幣を持って左・右・左に向いては直る動き。その後は神輿前に御幣を置く。
大祓詞、祝詞奏上を神職 A(斎主)が行う。斎主が座る時のみ茣蓙を敷く。大祓詞は神輿前で神職全員で唱えるが、祝詞は斎主のみ。

17：40　三献三度。駕輿丁2 名が神職 3 名と旧社家当主に対して行う。このときだけ当主が神職 B の隣の円座に座る。
一献目は蓋つき椀に入ったみそ汁。
二献目は漬物（たくあん）。駕輿丁が箸で 1 名 2 つずつ渡す。受ける側は手で食べる。たくあんは多めに盛られており、余ったらそのまま下げる。
三献目は田楽(串豆腐)。1 名 2 つずつ取る。一献目の椀は最後に下げる。
三献三度後、縁側に出て手と口のお清めをする。神職 D が柄杓で注ぐ。お清め後は懐紙で手を拭く。

17：55　撤饌
家族拝礼。当主が玉串拝礼。別の家の当主が玉串拝礼。このときも茣蓙を敷く。
土産柴配り。神職が柴の葉をちぎり、参列者及び駕輿丁に配る。

18：05　笏。神職全員が白マスクをして拝礼ののち警蹕。神輿から御神体を取り出して、参列者の背を叩く。肩から背へ 3 度叩き撫で、最後に頭に軽く乗せる。斎主が御神体を持ち、他 2 名の神職が御供の棒を持ち叩く。笏を神輿に戻すまで警蹕が続く。

列座列拝。神饌は縁側に下げ、駕輿丁はここで帰る。

（阿蘇古代神楽）

18：20　阿蘇古代神楽開始。

<榊（さかき）舞>神職 C が榊と鈴を持って舞う。神職 A が太鼓、神職 B が銅拍子、神職 D が笛を奏する。舞う人以外は烏帽子を外している。

<折敷（おしき）舞>縁側に出した神饌から米を折敷に移す。神職 B が折敷と鈴を持って舞う。銅拍子を神職 C と交代している。足の運び、舞い方は榊舞とほぼ同じ。最後に米を一つまみずつ神輿と参列者側に振り、残りは神輿にまく。

<剣舞>神職 A が刀と鈴を持って舞う。太鼓は神職 B、笛は C、銅拍子は神職 D へ交代。足の運びは前 2 つと同じ。

<幣舞>神職 C が神輿脇の御幣と鈴を持って舞う。太鼓は A、銅拍子は B、笛は神職 D に戻る。これだけ舞い方が異なり、神輿の前後をまっすぐに往復する。バンバ歩きの形。3 回舞った後、手に持った御幣で神職 A、B、旧社家当主、その他参列者の順にお清めをする。

※榊舞、折敷舞、剣舞は、まず神輿に向って左に体を向けて舞い、その次右、と時計回りにバツ印を描くような足運びとなっている。同じ舞いを 4 回繰り返す。幣舞は、同じ舞いを 3 回繰り返したのち、手に持った御幣でお清めをする。楽の調子はすべて同じ。

18：50　直会（なおらい）開始。

写真 8	迎え女郎 旧社家宅前にたてられた迎え女郎	

３－４．祭り揚げ（田作神事）

田作祭の最終日である亥の日に行われる。阿蘇神社で稲作の過程を模擬的に行う田作神事が披露され、一連の神事終了後には、歳禰神社へ神幸し、神輿の神を遷座する。

【祭り揚げ行程】
日時：令和 2 年 3 月 21 日　13：00 ごろ
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

阿蘇神社仮拝殿の祭壇前に阿蘇古代神楽用の茣蓙が広く敷かれている。参加者は 35 名程度。神輿前に太刀・金幣、両脇にヒメゴゼと御供の柴を配置。神職らは拝殿と社務所の横で待機。

（神事）

12：59　宮司はじめ神職らが入殿。神職 12 名、楽 2 名。神職は祭壇の両脇に座る。

13：00　修祓。神職 A が祓詞を奏上後、別の神職が大麻で神饌、玉串(2 箇所)、左右の神職ら、参列者の順にお清め。

13：05　献饌。右列神職 4 名で行う。この間、楽 2 名による笛と小太鼓。
神饌は上段左から、神酒、米（白・茶）、魚（鯛）。下段左から、果物、乾物、野菜、菓子類の順

13：10　斎主（宮司）祝詞奏上。

13：15　玉串拝礼。宮司をはじめ神職全員で拝礼。その後参列者による拝礼。
氏子会代表、講社代表、社家会代表・旧臣会代表、市長、県議、市議、振興局、消防署、区長会長、文化財保護委員長、商工会代表、ロータリークラブ代表、青年会議所代表、企業代表ら、御田歌保存会長、警護団長、氏子青年会(駕輿丁)、氏子婦人会の順。この間、右列の神職 3 名が、笙、篳篥、笛を奏する。
終了後は玉串の乗った台を奥に下げる。

（阿蘇古代神楽）

13：25　阿蘇古代神楽。神職 A が幣舞を舞う。神職 B が大太鼓、神職 C(司会)が笛、左列神職 1 名が銅拍子を奏する。宅祭りと同様の舞を 3 回繰り返したのち、鈴を鳴らしながら手に持った御幣を参列者の頭に持っていく。その後、反時計回りに 1 回まわってから中央で座って一礼で終了。

（田作神事）

13：35 ごろ<千町万町>神職 A と神職 B が、赤い実のついたえぼしの木の葉数枚に「千町万町」と書いていく。元から数枚には書かれており、それに足す形。書き終えたら、神輿の両脇、柴の隣に立て掛ける。
<立役>立役の神職が神輿の正面に立ち、別の神職が両袖に榊枝をはさみ、太刀を佩かせ、弓矢を持たせる。

13：40　<千町万町配り>神輿両脇のものとは別に、事前に用意していた「千町万町」の葉を参列者に渡す。参列者一人一人に直渡しすることはない。

<溝攫え>道具(御前迎えでヒメゴゼの入った柴に挿していたミツマタの枝の先に、藁を巻き付けて箒状にしたもの)を持ち、溝攫えの所作を行う。片手に藁で作ったものを持ち足にかけて一歩をふみ出し、もう片方の手に持った道具で溝を攫う動きをする。神輿前、神職前（左方・右方）の順に行う。1ヶ所につき、3回所作×2回。

<鍬柄配り>ススキの茎を三本束ねたものを配る。これも直渡しはしない。

<成高>神社では「なりたかし」という。立役が太鼓の音とともに神輿前から茣蓙のところに下り、反時計回りに一度だけゆっくりと一周する。

13：45　<田打>神職4名が鍬柄を持って一列に並び、一拝する。

<鼻取>神職2名が立役の脇=神輿の両脇に行き、鼻取の所作をする。

<種蒔き>神職Aが神輿の左右で籾種を3回ずつまく。その後、小分けした籾種を参列者に配る。今年は「くまさんのかがやき」。

<成高>上記と同様、太鼓が鳴る中、立役が反時計回りに一周して戻る。

13:50　<鳥追い>神職1名が､拍子木のような棒二本を持って神輿の左右(壇下)で叩き鳴らす。

<引苗>神職4名が2本の太めの青竹を肩に担ぎ、上下に小さく動かす。他の神職2名が、これを乗り越える。1回目は参列者から神輿側に向って、2回目はこれを戻る形で乗り越えていく。

<苗配り>20㎝程度に切り揃えられた藁を3本まとめたものを配る。

<田植>神職4名が一列に並び、(おそらく上記の苗を持って)田植えの所作をする。

<五穀>神職1名が茣蓙中央に神輿に向ってうつ伏せになり、別の神職2名がその背に緑色の薄手の水干を畳んで敷き、浅手の蓋のような木の台座を乗せる。さらにその上に小太鼓を乗せ、その両側に笠を立て掛ける。

<潤水>神職の一名が水桶を持ち、五穀に振りかける所作をし、別の神職が笠を盾にしてそれを防ぐ所作をする。

<大富>五穀の両脇に神職2名が控え、立役が「大富の小富の生まれさせ給ふ時、尊き神やます」と唱え、同承が祈主に同様の神文を唱える。祈主がまた同様の神文を五穀に向って唱える。これと同様の流れを「五穀の神生まれさせ給ふ時、尊き神やましまます」と「木の根を枕とし、木の葉を御座とし、高山の末短山の末を七度廻らせ給ふ時神は何国にやましまます。しばらく尋ね給へ」の二つの神文で繰り返す。最後の神文の後、脇の神職から受け取ったバチで祈主が五穀の背の小太鼓を一度叩く。叩かれた五穀は素早く起き上がろうとするので、ずり落ちる小太鼓を両脇の神職が支える。

<笏>神職Aが神輿の左で拝礼、白マスクをして神輿から笏を取り出す。もう一名の神職の背を叩き撫でる。この間、参列者は全員低頭してこれを見ないようにする。

<拮馬>拮馬役の2名の神職が青竹に薦を掛けたものを支える。乗問役が榊の小枝を持ち、「この馬は癖はござらぬか」と問い、これに拮馬役が「はね申す」と応える。乗問役が青竹を乗り越える。

<立役解き>はじめと同様に持たせた弓矢、太刀、榊を外す。

14：05　撤饌。神職4名で撤饌を行う。楽2名が小太鼓と笛を奏する。
斎主(宮司)が神輿前に座し、祝詞奏上。宮司挨拶。

14：15 ごろ神輿出立の準備。神輿降ろしは神職のみで、神輿本体を扱う際は、袖で見えないように隠す。駕輿丁に神輿を担がせ、柴 2 つは神輿の担ぎ部分の前後に乗せる。
行列は、警護団、神職（太刀）、神職（金幣）、神輿、斎主で、メンバーは駕輿丁と警護団以外は横笹神事のときと同じ。また、神幸の道順も横笹と同様。

（歳禰神社）

14：30　歳禰神社着。右回りで神殿前に行く。氏子は拝殿で直会の準備をしている。
神輿を安置後、神職らは白マスクをし、警蹕をしながら神輿の御神体を遷座。氏子は低頭して待つ。その後、神輿そのままで祝詞奏上。太刀と金幣は神殿扉の両脇に立て掛ける。

14：40 ごろ神輿を拝殿（兼公民館）に移す。このとき、神殿の扉は開けたまま。
土産柴。神職 2 名が柴の葉を取り、氏子らに配る。氏子は女性ばかり 14 名。
御笏。神職らがマスクをして神殿へ。警蹕をしながら笏（御神体と御供）を取り出す。低頭した氏子の肩から背を 3 回叩き撫で、最後に頭に軽く乗せる。各神職が持つ笏に御神体や御供の笏を重ねる形で、御神体等と直接触れないようにしている。斎主が御笏、他神職が御供の笏で叩く。叩くのは、氏子、駕輿丁、警護団の順。そのまま神殿に戻り、御笏を戻す。ここまでずっと警蹕を続けている。神殿の扉を閉める。

15：00　直会開始。氏子らが赤飯を始め、様々な料理やお菓子をお重に詰めて持ち寄る。

15：25　直会終了。御供の柴は氏子代表に渡す。ヒメゴゼの柴のみを神輿に乗せて帰る。

15：30　歳禰神社出発。行きと同じ経路で戻る。

15：40　阿蘇神社着。拝殿むかって右に神輿を安置。太刀、金幣も神輿前に置いて終了。

【聞き取り他】

・今年の駕輿丁は 2 名とも高校生。

・この日の直会の前に、地元陣の町の薬師堂の祭りがあっていた。

【他記録との相違】

・神饌に鏡餅はない。また、田作神事に関する神職の人数が現在は増えている。

・今年は新型コロナウイルスの流行の影響で招待者（参加者）は少ない。また、同様の理由で田作神事の直会が中止となり、弁当配布に代わっている。

・この日特に卯の市はなく、近年は市が立つことはない。

４．国造神社の春祭り

新暦の 3 月 28 日に、国造神社の春祭りと末社である鯰(なまず)社の例祭が一緒に行われる。元から神事のみ、参列者も宮総代数名のみの簡単なものであったという。

【春祭り行程】
日時：令和 2 年 3 月 28 日　9：00 開始
開始場所：国造神社拝殿

8：50　宮司の声掛けにより、宮司・総代らで神饌(しんせん)を社務所から拝殿へ持っていく。
神饌は 7 つ用意されており、内 5 つは国造神社拝殿へ、2 つは鯰社前へ。
国造神社の神饌は、左から野菜(大根・人参・トマト・ほうれん草)、神酒(塩)、米、乾物(昆布・イリコ)、果物(バナナ・リンゴ・イチゴ)
宮司による春祭り開始の宣言。拝殿入口に注連縄(しめなわ)、参列者は総代 6 名。
祓詞、大麻(おおぬさ)で神饌、玉串、総代らの順にお清め。献饌(けんせん)。
9：00　大祓詞・祝詞奏上。
宮司玉串拝礼。宮総代の内 1 名が代表で玉串拝礼。
撤饌(てっせん)して終了。鯰社へ移動。
9：10 ごろ全員が鯰社の前へ。宮司が玉串拝礼ののち、上記と同じ総代が代表して玉串拝礼。
祝詞やお祓(はら)いはない。(国造神社での神事でまとめてしている)
神饌を持って社務所へ移動。神饌は、神酒(神酒・塩・水)、野菜他(トマト・人参・イチゴ・ほうれん草)
社務所にて直会(なおらい)。形だけ神饌の神酒を飲む。コロナ対策か、それ以外はペットボトルのお茶のみ。
9：40 ごろ直会終了。

【聞き取り内容】
・以前は総代になる方は地区の長老が多く、春祭りの時間はいつでも良いとのことだったが、近年若い世代に交代してからは仕事を持っている人が多く、朝から開催することが多くなった。開始時間については不定期となっている。

【既存調査との相違】
・開始時間の前倒し。理由は上記の通り。

５．風祭

稲穂への風害を鎮めるために、宮地の風宮から手野の風宮まで神職が御幣を持って練り歩く神事で、旧暦 4 月 4 日と旧暦 7 月 4 日に行われる。

【風祭(春)の行程】

日時：令和 2 年 4 月 26 日　11：00 開始

開始場所：風宮（宮地）

（宮地の風宮）

10：30 ごろ神職 2 名と氏子らが準備で既に来ている。

拝殿に茣蓙が敷かれ、入り口と拝殿・本殿それぞれに注連縄が張ってある。

本殿の木箱に小豆握り飯と竹筒の神酒を入れ､その前に御幣が 2 本立てかけてある。

氏子は本殿にお賽銭をしてから拝殿へ。

神饌は神酒、米、鏡餅 2 基、野菜(トマト・キャベツ・ほうれん草)、果物(バナナ・リンゴ・キウイ)、乾物、お重(小豆握り飯)

氏子が全員そろったため、少し早めに神事開始。氏子は 4 名。

10：50　修祓の儀。向かって右の大麻の前で神職 B(阿蘇神社の神職)がお祓いの詞を奏上。

大麻で神饌、榊、神職 A(国造神社宮司)、氏子の順にお清め。献饌の儀。

祝詞奏上。神職 A が中央に座り、大祓詞を奏上。神職 B も一緒に唱える。

風鎮めの祝詞を神職 A が奏上。

玉串拝礼。はじめに神職 A、続いて氏子 4 名が順番に奉納。撤饌。

11：10 ごろ一同一礼で終了。神職 A によるあいさつ。

神饌に上げていた小豆握り飯を、神職 B が箸で神職 A、氏子らに配る。

その場で食べる。

11：15　氏子らが解散。

神饌や道具類の片づけを神職のみで行う。鏡餅だけ氏子が持って帰る。

11：25　神職が 1 本ずつ御幣を持って近くの氏子宅へお参り。

氏子宅を出てから、2 方向に分かれて歩いていく。一人(神職 B)は市役所裏を通って一本道の農道へ。もう一人(神職 A)はやまなみ線を古城小方面へ、山裾を通って手野へ向かう。道順については、図 9 を参照。

（手野の風宮）

12：30 ごろ手野の風宮着。持ってきた御幣 2 本を木箱に納めて、準備を始める。

竹筒 2 本に神酒を入れ、竹輪の上に和紙を置き、小豆握り飯を置いていく。今年(令和 2 年)は閏年のため 13 個用意する。

12：40 ごろ神事開始。修祓の儀、献饌、祝詞奏上、玉串拝礼、撤饌で終了。

神饌は鏡餅がないだけで他はほぼ一緒。

小豆握り飯を神職・氏子に渡す。

13：10　　片付け終了。神職らは国造神社宮司宅で休憩してから帰る。

【聞き取り内容】

以下、宮司からの聞き取り内容

・神職 2 名が歩く距離は数百メートル違うことから、到着時間も 10 分ほど異なる。昔は田んぼの畦道(あぜみち)を通っていたため、神職 B の道のほうが足を取られて大変だったという。

・古城小学校の近くを通るので、プールに入っていたとき(おそらく旧 7 月 4 日の風祭)父親(前の宮司)が歩いているのを見たことがある(現在古城小学校は閉校している)。

・手野の風宮の世話役は K 家が行っていたが、平成 24(2012)年水害の後引っ越してしまった。この日氏子不在。これは、直会の中止により時間が大幅に早まったこともあるかもしれない。今後継続調査の必要あり。

・昔は手野の風祭は K 家が仕切っていたが、40～50 年前から準備をすべて神社側がするようになった。昔は車が普及していなかったので、バスで神饌等の食べ物を届けに来ていた（食べ物がいたむため)。

・夏の風祭(7 月)ではよく近所の子供たちが小豆握り飯をもらいに来ていた。

・小豆握り飯は神社の炊膳(すいぜん)の女性が作っている。

・小豆握り飯はそのまま置いておく。1 ヶ月後くらいに様子を見てカビの付き具合を見る。確かにカビの付き方は米の出来によって異なってくるように見えるという。

【他記録との相違】

・今年は新型コロナウイルス感染症の流行により、すべての直会が中止。同様に神酒を回すこともなかった。

・神道文化会(1960)及び村崎氏(1993)では、小豆握り飯のカビの付き具合を見るのは次の風祭、つまり旧暦 7 月 4 日のときと記述があるが、現在は上記聞き取りの通り 1 ヶ月後となっている。

写真 9	風祭	
	手野の風宮における風祭の様子	

【風祭(夏)の行程】

日時：令和 2 年 8 月 22 日（土）　11：00～

開始場所：風宮（宮地）

（宮地の風宮）

10：30 ごろ　神職 2 名が準備を開始。

本殿の木箱に小豆握り飯と竹筒の神酒を入れる。その前に御幣(紙垂)を 2 本立てかける。神饌は上段左から魚(サバ・海苔)、米、神酒(酒・塩・水)、野菜(地きゅうり・ひじき)、下段左から鏡餅、果物(バナナ・オレンジ・リンゴ)、重箱(小豆握り飯)、鏡餅の順。鏡餅は氏子が持ってくる。

10：50 ごろ　氏子が全員そろったため、少し早めに神事開始。参列者(氏子)は 3 名。

修祓の儀。大麻の前で神職 B がお祓いの詞を奏上後、大麻で神饌・榊、神職 A(国造神社宮司)、氏子の順にお清め。

献饌の儀。

大祓詞奏上。神職 A が中央に座り、神職 B も一緒に唱える。

風鎮めの祝詞を神職 A が奏上。

玉串拝礼。はじめに神職 A、続いて氏子 3 人が順番に奉納。

撤饌。全員一拝で終了。

11：10 ごろ　神饌に上げていた小豆握り飯を、神職 B が箸で神職 A、氏子らに配り、その場で食べる。

片付け開始。神饌のお下がりは近所の氏子が持ち帰り、神饌の鏡餅も持ってきた氏子らが持ち帰る。

拝殿の片付け後、本殿に置いていた御幣を持って氏子宅へ。お祈り。

11：30　神職が 1 本ずつ御幣を持って出発。途中から 2 方向に分かれて歩いていく。

一人(神職 B)は市役所裏を通って一本道の農道へ。もう一人(神職 A)はやまなみ線を古城小方面へ行き、山裾を通って手野へ歩く。

この日、雷雨のため途中から車移動。道順については図 9 を参照。

（手野の風宮）

12：15 ごろ　手野の風宮着。持ってきた御幣 2 本を本殿の木箱に納めて、神事の準備を始める。竹筒 2 本に神酒を入れ、竹輪の上に木の葉を置き、小豆握り飯を置いていく。今年(令和 2 年)は閏年のため 13 個用意する。

神饌は、左から重箱(小豆握り飯)、野菜(地きゅうり・海苔)、神酒(酒・塩・水)、米、魚(サバ・芽ひじき)、果物(バナナ・オレンジ・リンゴ)の順。三方は使用しない。

12：30　神事開始。修祓の儀、献饌、祝詞奏上、玉串拝礼、撤饌で終了。

小豆握り飯を神職・氏子に渡す。

12：45　片付け終了。神職らは神職 A 宅で休憩してから帰る。

【聞き取り内容】

以下、宮地の風宮氏子からの聞き取り内容

・昔は氏子が 5～6 軒あったが、今では 3 軒ほど。風宮(宮地)周辺に住宅はほとんどなく、Y 家しかなかった。そのため、氏子は Y 家と少し離れた亀尾崎の数軒のみとなっている。

以下、国造神社宮司からの聞き取り内容

・過去においても、雷雨の際は神職の安全確保のため車移動することがあった。

・十数年前から旧暦 7 月 4 日のときだけ小豆握り飯を置く白紙がコナラの葉に代わっている。これは、過去の記録*を再現したもの。コナラの木は宮地の風宮境内に十数年前に植えており、そこから調達している。春(旧暦 4 月 4 日)に使用しないのは、まだ新芽だから。また、年によっては葉が足りなかったり大きすぎたりして使えないことがある。

・小豆握り飯については、1 か月後くらいにカビの生え具合を確認して阿蘇神社宮司に報告する。報告のみで占うことはしない。また、内容を公開することもない。

*聞き取りでは「明治初期か昭和期の記録」とのことだったが、神道文化会(1960)に「底には楢(なら)の葉を敷く。」とあるため、この文献のことを指している可能性あり。

【他記録との相違】

・前回(旧暦 4 月 4 日)と同様に、新型コロナウイルス感染症の流行によってすべての直会が中止。

・上記の聞き取り内容の通り、小豆握り飯を置く白紙がコナラの葉になっている。

・宮地の風宮から手野の風宮までの移動について、一の宮町(1984)では神職 2 名が同じ車で移動。村崎氏(1993)では二手に分かれて車で移動だったが、現在は記録以前の様式に戻り徒歩移動となっている。これは国造神社宮司の祖父・父の代のことで、宮司が御高齢で歩くのが厳しかったため。今の宮司に代わってからは徒歩移動に変わったという。

写真 10	小豆握り飯と竹筒	
	手野の風宮に奉納された、神酒と小豆握り飯 コナラの葉の上に 13 個の小豆握り飯が置かれている	

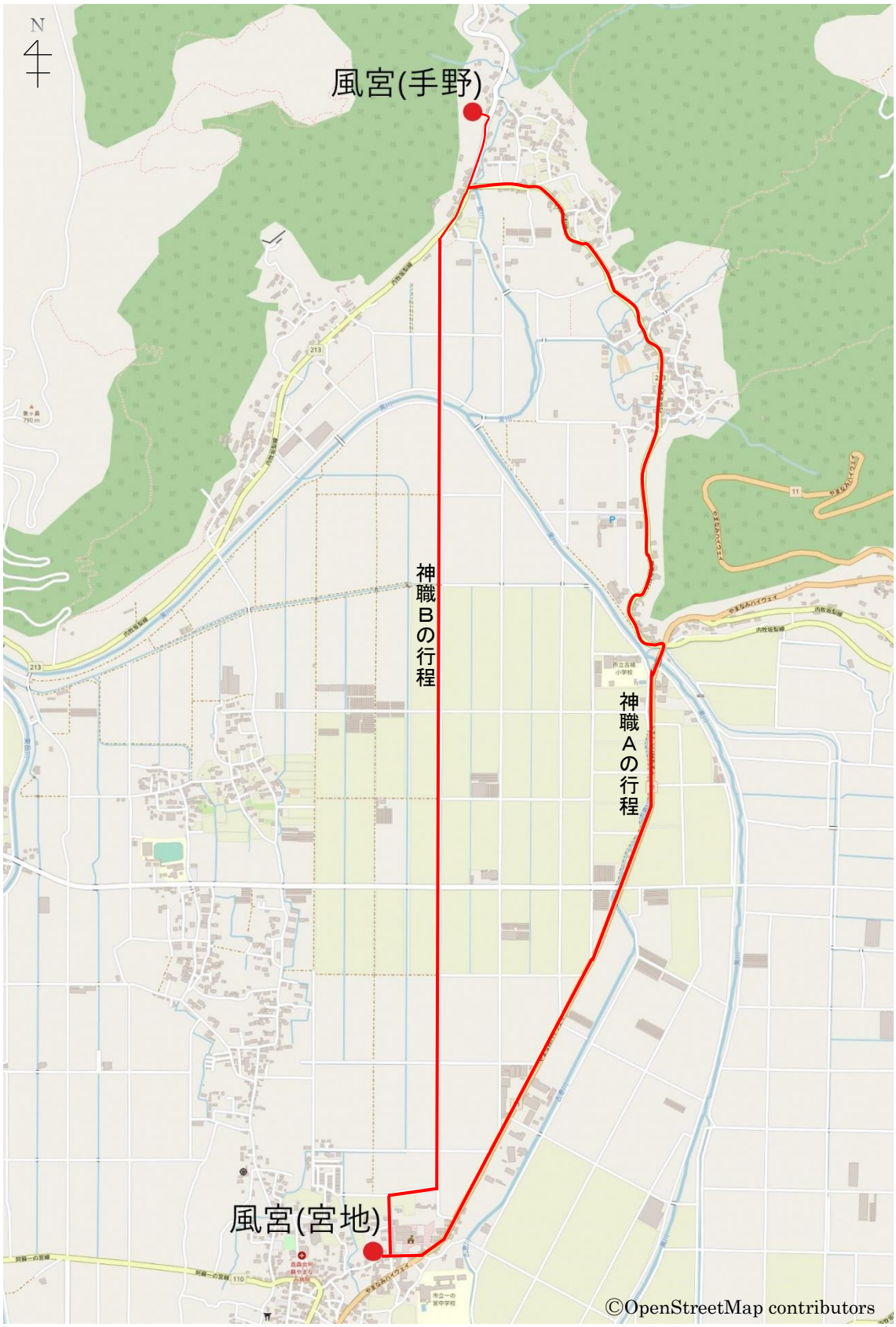


図 9　風祭行程図

６．国造神社の御田祭

豊作を祈願する国造神社で最も大きな祭礼である。神幸行列が国造神社から御仮屋までを神幸し、神輿を担ぐ駕輿丁らが御田歌を歌いながら神社へ還御する。還御した後は、拝殿での歌い納めののち、各地区の主だった家の前で御田歌の歌い込みを行う。毎年新暦の 7 月 26 日に執り行われるが、前日の遷座祭では、遷座した神輿を拝殿に安置し、総代がお籠りして一晩過ごす。

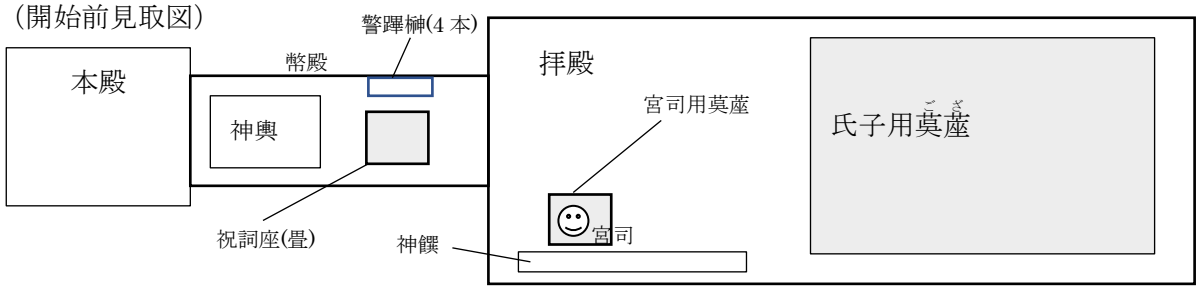
６－１．前日遷座祭

遷座した神輿を拝殿に安置し、この神輿を守るために総代がお籠りして一晩過ごす。

【前日遷座祭行程】
日時：令和 2 年 7 月 25 日　18：00 開始
開始場所：国造神社拝殿

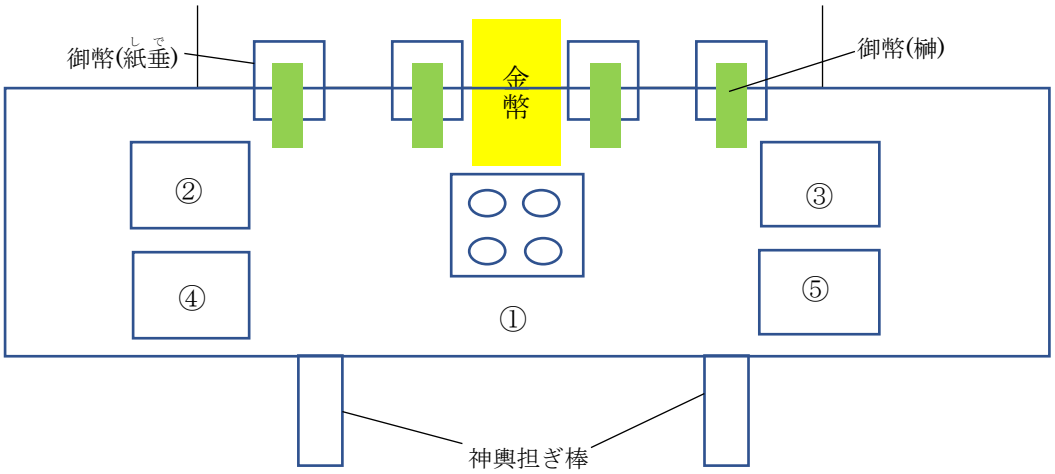
17：50 ごろ　役員が北宮館(社務所)に集まりだす。時間が来たら宮司の声掛けで神饌を持って拝殿へ移動する。

（開始前見取図）



18：00　宮司あいさつ。
参列者は氏子総代ら 12 名。本来は 14 名だが今年は 2 名欠席。総代らの並びは不順だが、総代長は前列中央に座る。
次にお祓いの詞。御幣(榊に紙垂を付けたもの)で神饌、玉串、氏子の順に祓う。
ミタマウツシ(御霊遷しヵ)。宮司が拝殿の電気を消し、本殿扉前の階段下で大祓詞・祝詞奏上。
祝詞後、宮司が御幣を持ち白マスクを着けて本殿脇の扉から中へ入り、御神体を取り出して正面扉から出て神輿正面に回り込み、御神体を神輿に遷す。
この間、警蹕。4 本の紙垂の御幣を神輿の前に立てて、白マスクを外す。
更に紙垂の御幣の前に紙垂を付けた榊を 4 本、金幣を 1 本立てる。
以上の所作が終わったら電気を点ける。これで遷座終了。
すぐに献饌。神輿の担ぎ棒の上に 2 枚の木板を渡し、その上に神饌を奉る。

（神輿前に奉納された御幣・神饌見取図）



神饌は、①米(神様の数 4 皿)、②神酒、③干魚(トビ)、④野菜(ナス・大根・人参・トマト・きゅうり)、⑤果物(バナナ、リンゴ、梨)

18：20　祝詞奏上。宮司が玉串拝礼。その後総代長のみ玉串拝礼。

18：25　撤饌。宮司あいさつで終了。
氏子らが神饌を社務所に引き、神輿番他数名を残して解散。
この後、神輿番 2 名とその手伝い 2 名、宮司による直会。手伝い 2 名は日が暮れると帰り、神輿番 2 名のみが拝殿で夜を明かす。これは、神輿にいたずら等をさせないための見張りで、本来は寝ずの番である。

【聞き取り内容】

・今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、簡易的になっている。ただし、前夜遷座についてどの程度簡略化されたのかは過去の記録が不十分のため、今後通常の祭事を見てからでないと判断できない。

・拝殿の準備（神輿の移動、注連縄・幕・茣蓙等）は、この日の午前中にする。

・今年の神輿番は東手野が当番。毎年、東手野・西手野で交互に神輿番をする。また、例年は祭り前夜と当日夜の 2 泊していたが、今年は神事簡略のため前夜の 1 泊のみ。2 泊は東手野ならその部落内で交代で 1 泊ずつしていた。

・尾籠は神輿番はせず、御仮屋の管理をしている。主に御田祭のための準備と草刈。

・例年は社務所で直会をしてから神輿番のみ拝殿に上がっていたが、今年は直会が中止となったため拝殿での簡易直会となった。宮司も拝殿の直会に参加したのは初めてとのこと。

【既存調査との相違】

・過去の記録には簡単な記述しかなく、比較は困難である。

６－２．御田祭

例年であれば、国造神社と御仮屋の間を神輿や宇奈利などの神幸行列が往復し、駕輿丁らは御田歌を高らかに歌う盛大な祭礼だが、今年は中止となり、神事のみの執行となった。

【御田祭行程】

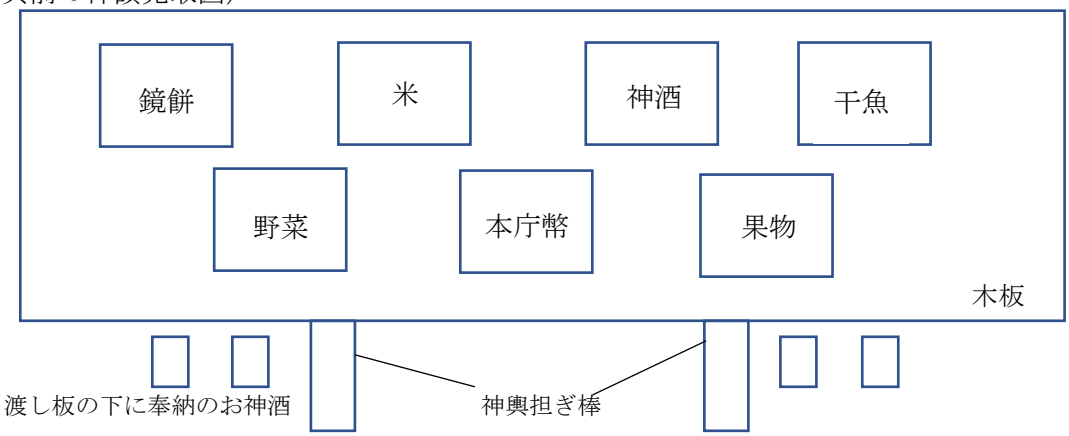
日時：令和 2 年 7 月 26 日　10：00 開始

開始場所：国造神社拝殿

9：00 ごろ　氏子総代らが社務所周辺に集まりだす。社務所には入らず、建物横で玉串料の受付を行う。玉串料を納めた人には手ぬぐいを配布する。

9：50 ごろ　神酒と玉串料を持って拝殿へ移動する。開始前に御田歌の歌詞が配られる。

（神輿前の神饌見取図）



10：00　神饌が整い次第、神事開始。宮司による開始のあいさつ。
修祓の儀。宮司が神輿の前で祓詞奏上。御幣(榊)で神饌、玉串、氏子の順位に祓う。
全員一礼の後、献饌。宮司による祝詞奏上。宮司による玉串拝礼の後、氏子総代長が代表して玉串拝礼。総代らも併せて二礼二拍手一拝。

10：10　撤饌。すべての神饌を、拝殿脇に撤収していく。
御田歌奉告。「田の神」「楽納め」のみ歌う。各歌約 7 分。
遷座の儀。宮司が拝殿の電気を消し、神輿前の金幣を拝殿に移動し、御幣(紙垂・榊各 4 本)も神輿前から降ろす。神輿前で二礼二拍手一拝の後、白マスクを着け、警蹕しながら御神体を取り出す。御幣(紙垂・榊)と一緒に本殿正面から中へ。警蹕が止み、内側から正面の扉を閉め、脇扉から出てくる。

10:35　本殿階段前で本殿に向かって祝詞奏上。二礼二拍手一拝の後、拝殿の電気を点ける。

10：40 ごろ　神事終了。宮司あいさつ。
氏子総代らによって片付け。神饌・神酒等は社務所へ引き、金幣と神輿装飾の一部は神輿舎へ。神輿は一度幣殿から拝殿に移動させ、装飾等を取外し片付けていき、

全て取り除いた後神輿舎へ移動。

11：05　氏子総代長による簡単なあいさつで解散。直会の代わりに弁当を配布。
神輿に載せていた苗は、欲しい人が持って帰る。

【聞き取り内容】

・例年は 8 時ごろに集まって、着物の着付け等の準備をしていたが、今年は総代のみのため、9 時集合。

・御田歌について、毎年東手野と西手野で前頭・後頭を交代で務めていた。尾籠(おごもり)は前 3 名、後ろ 2 名に分かれたりする。今年は西手野が前頭の予定だった。しかし、今年は総代のみのため、特に前頭等は決めずに歌った。

・神饌の干魚は毎年万引(シイラ)が使用される。近年、需要がないせいか熊本ではなかなかシイラの干物が作られないため、今年は遠方に住む宮司の知り合いから譲り受けた。

【既存調査との相違】

・今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、神幸行列及び直会が中止となった。前回中止となったのは手野地域にも被害が出た平成 24(2012)年水害で、行列は中止となったが青年団（駕輿丁(かよちょう)）は出席してもらい、楽納めで歌った。しかし、今回は御田歌の練習もできていないため、総代のみの神事となった。同様に、神事後各地区で歌う「歌い込み」もない。

・献幣使(けんぺいし)が毎年神社庁より派遣されるが、上記と同様の理由で断った。神社庁からは本庁幣の献幣のみ。阿蘇神社からの神職の助勤もない。

７．阿蘇神社の御田祭

正式には「御田植神幸式」と呼ばれている。阿蘇神社の例大祭に位置付けられ、神々が田植の終わった田の様子を巡検する祭りであると考えられている。例年であれば、神輿や宇奈利などの神幸行列が阿蘇神社から一の御仮屋(一の御田)、二の御仮屋(二の御田)を練り歩くが、今年は中止となり神事のみ執り行った。

７－１．前夜御遷座祭

神殿の神様を神輿に遷座する神事。遷座をするため、暗く静かな夜に執り行われる。

【前夜御遷座祭の行程】
日時：令和 2 年 7 月 27 日　19：30 開始
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

神輿 4 基が仮拝殿に出してある。担ぎ棒に木板 1 枚が渡してあり、その上に御幣(榊)が 1 本寝せて置かれている。神輿は一の輿・三の輿の屋根に宝珠、二の輿・四の輿に鳳凰がある。
参列者はいない。

19:30 ごろ　仮拝殿と社務所の間に宮司をはじめ神職5名が待機､仮拝殿内に神職3名とが遷座夫1名が待機する。

19：35　宮司を先頭に神職 5 名が参入。太鼓をたたき、開始の合図。
大祓の儀。神職 8 名全員が神輿の前に並び、全員で大祓詞奏上。並びは宮司を先頭に、その後ろ 3 名、4 名の 3 列。
大祓詞奏上後、神職 2 名を残して着座。1 人が大麻(榊に紙垂をつけたもの)で神輿、神饌、神職、遷座夫の順に祓い、その後ろをもう 1 人が榊の枝を塩水につけて祓う仕草をする。

19：45　斎主一拝。宮司が神輿前で一拝し、合わせて参列者全員が一礼する。
遷座の儀。全員が白マスクを着用し、電気を消す。提灯の準備。

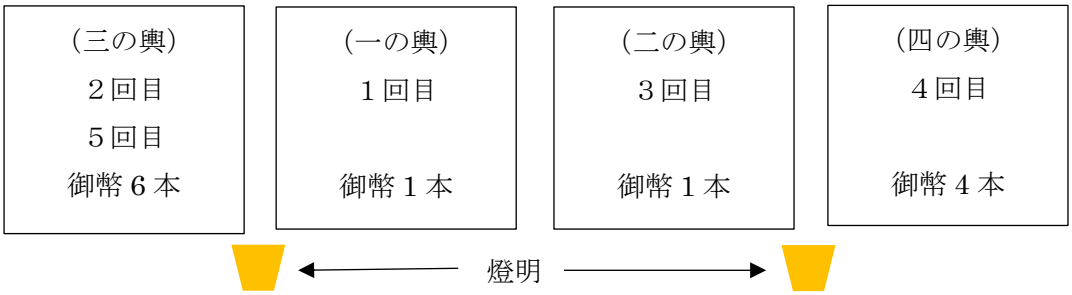
19：50 ごろ　神職 1 名を残して神職 7 名と遷座夫が神域へ。警蹕をしながら御神体を三方に載せて羽二重をかぶせ、三方を持つ神職に黄傘を差し、遷座夫が足元を照らしながら仮拝殿に戻ってくる。神殿に入るのは宮司と宮司家に関係する禰宜のみで、御神体を触れるのは宮司だけ。神殿から取り出した御幣等は神殿外に待機している神職に渡し、仮拝殿に待機している神職が受け取り、御神体を神輿に入れる。御幣は神輿の前に立てる。御幣は神様の数を立てる。
ここまで警蹕をするが、御幣を神輿前に立てたところで警蹕をやめてしまう。また神域に入る際に警蹕を始める。これを 5 回続ける。順番は、一の神殿の健磐龍命の

みを一の輿へ、次に一の神殿の男神 4 柱を三の輿へ、二の神殿の阿蘇比咩命のみを二の輿へ、二の神殿女神 4 柱を四の輿へ、最後に三の神殿の 2 柱を三の輿へ遷座する。

灯りは 2 箇所の燈明のみ。5 回目の遷座を終えると神職が全員戻り、電気を点ける。

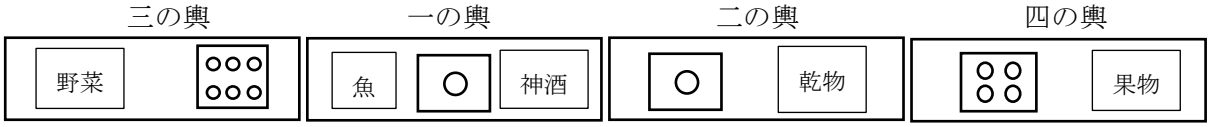
マスクを外し、神輿前の御幣・榊の前にさらに金幣を置く。

(遷座の順番と御幣の数)



20：15　献饌。神職 4 名が神饌を神輿前の渡し板の上に置いていく。このとき、笙・篳篥・龍笛による楽奏あり。

(神輿前の神饌見取図)



神饌は米、神酒(酒・水・塩)、魚、乾物(昆布)、野菜(ナス・きゅうり)、果物(梨)の順で、米は一の輿から順番に置いていく。なお、米は神輿の中の神様の数だけ献じるため、一・二の輿は 1 皿、三の輿は 6 皿、四の輿は 4 皿。

20：20 ごろ　宮司が神輿の前で祝詞奏上。

その後、宮司による玉串拝礼。神職全員が神輿の前に並ぶ。神職らが着座後、遷座夫による玉串拝礼。この間、雅楽奏。

20：30　撤饌。神職 1 名が神酒の蓋を閉める。この間、雅楽奏。

斎主一拝、終了の太鼓で神事は終了する。

神輿前で記念撮影。

20：35　神職らが退下。楽奏あり。

【既存調査との相違】

・雲行きが怪しいため、時間を早めて 19 時 30 分ごろから開始した。

・復旧工事中のため、神輿は祝詞殿ではなく仮拝殿に安置する。

・遷座夫が 3 名から 1 名に減。このときは松明は持たず、懐中電灯で代用している。

・この日は雨の予報だったため、雨天用の黄傘を使用した。傘で三方を持った神職を隠す仕草はしなくなっている。復旧工事中で拝殿や境内側から簡単に伺えない状況になっているからという可能性もあり。要確認。

・切麻を使用しない。一方、翌日の御田祭の神事で行う榊枝での祓いを行う。神事の統合か。

７－２．御田祭

正式には御田植神幸式という。例年であれば、阿蘇神社を出発した神幸行列が一の御仮屋(一のおんだ)、二の御仮屋(二のおんだ)へ向かい、御田歌を歌いながらゆっくりと還御していく。各御仮屋や阿蘇神社境内では神輿に苗を投げる「御田植式」があるが、いずれも中止となり、献幣祭、御饌祭(本来は御仮屋で行う神事)、成就祭のみを実施した。

【御田祭神事の行程】
日時：令和２年７月 28 日　10：00 開始
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

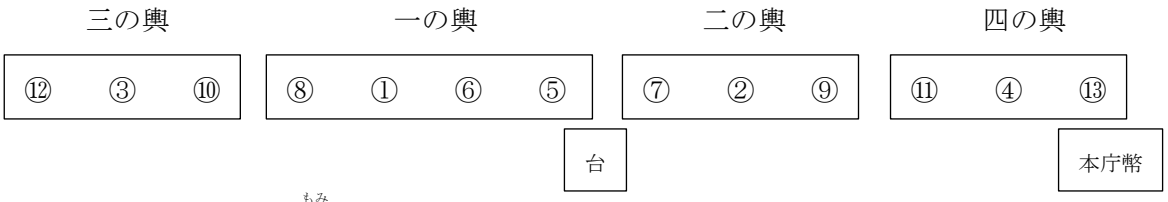
<献幣祭>
参列者は氏子会会長はじめ御田歌保存会、駕輿丁頭・召立役等計 15 名で、ワイシャツ・ネクタイ姿。仮拝殿と社務所の間にテントを張り、祓所ができている。仮拝殿内には、3 名の神職が待機している。

9：57　神職６名が斎館から仮拝殿へ移動、その後ろから献幣使と随使が入殿。
修祓の儀。神職１名が祓所へ行き、祓詞奏上。奏上後、入れ替わりで別の神職２名が祓所の榊の枝を持ち、神饌、本庁幣、玉串、神職ら、献幣使、参列者の順に清める。終わるとこれらを祓所に戻す。

10：05　宮司一拝。
開扉。宮司と神職１名が神輿の前に立つ。神職１名が警蹕して二礼二拍手一拝。
この間、笙が奏される。

10：10　献饌。宮司以外の５名の神職で行う。笙・篳篥・龍笛による雅楽奏あり。

（献饌の順番と位置図）



①～④米、⑤神酒、⑥籾、⑦鏡餅、⑧鯛、⑨海菜(煮干し・寒天)、⑩野菜(大根・人参・きゅうり)、⑪果物(ブドウ・梨・バナナ)、⑫菓子、⑬塩・水の順に奉納。
宮司による祝詞奏上。
本庁幣献上。随使が脇にある本庁幣を神社側の神職へ渡し、神輿前の台に置く。

10：25　献幣使祭詞奏上。熊本県神社庁からの献幣使による祝詞奏上。

10：30　阿蘇古代神楽。神輿前に茣蓙を敷き、その上で幣舞。採物は左手に御幣、右手に鈴。楽は大太鼓と横笛２本、銅拍子。３回舞ってから御幣で参列者の頭をなでる。
すべて終わったら茣蓙を片付けて玉串台を出す。

10：40　宮司玉串拝礼。神職全員が神輿前に並び奉納する。

次に献幣使と随使、氏子会長、御田歌保存会会長、召立役代表(四の輿召立役)、輿頭代表(四の輿頭)の順に玉串拝礼。この間、雅楽奏。

撤饌。神職 5 名で本庁幣と神饌を献饌とは逆の順で撤収する。この間も雅楽奏。

閉扉。宮司が神輿前で警蹕（3 回)。この間笙のみ奏する。

10：55　宮司一拝

宮司祝詞奏上。一度着座してから再度神輿前で祝詞。これは、コロナの関係で神幸行列が中止としたことの神前報告。

11：00　御田歌。歌は御田植式で歌う歌詞。御田歌保存会長から歌いはじめ、参列者全員で歌う。約 9 分。

「一つ謡ひて此の田の　神の参らしょう　神も叡覧　田主も植えて歓ぶ」

11：10　祝電披露、宮司あいさつ、太鼓で終了。

宮司をはじめ神職及び献幣使が退下。参列者には弁当が配られ解散。

<御饌祭>

神饌が 14 基用意されている。神饌は全ての高杯が同じもの。参列者なし。

12：57　宮司はじめ神職 7 名が入殿。雅楽奏あり。開始の太鼓。

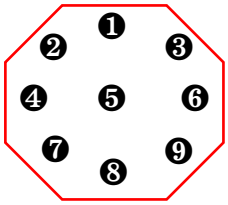
13：00　修祓の儀。神職 1 名が祓所へ行き、祓詞奏上。この神職が戻ると別の神職が祓所へ行き、大麻(榊)を持ってきて神饌、玉串、神職らの順に祓う。

宮司一拝。

13：05　献饌。神職 5 名で行う。雅楽奏。①～⑭の順に神饌14 基、次に神酒を置く。

（献撰の順番と位置図）

（神饌位置図）



❶粽（3 本）　❷餅　❸マンビキ(干物)
❹山芋　❺昆布　❻スルメ
❼イクリ　❽トサカノリ　❾ナス

13：15　宮司による祝詞奏上。

宮司玉串拝礼。

13：20　撤饌。神饌は退かず、神酒の蓋を閉めるのみ。この間、楽奏。

宮司一拝、終了の太鼓で終わる。すぐに神職のみの写真撮影。

13：25　宮司をはじめとした 6 名の神職が退下。楽奏あり。

<成就祭>

参列者は午前と同じメンバー。

16：55　神職 6 名が入殿、このとき雅楽奏あり。

17：00　開始の太鼓。

修祓(しゅばつ)の儀。神職 1 名が祓所(はらえど)で祓詞奏上。別の神職が大麻(おおぬさ)を祓所から持ってきて神饌(しんせん)、玉串、神職ら、参列者の順に清める。

17：05　斎主(さいしゅ)一拝。

献饌(けんせん)。神職 5 名で神饌を運ぶ。この間楽奏あり。

（献饌の順番と位置図）

三の輿	一の輿	二の輿	四の輿
⑧　③	⑥　①　⑤	②　⑦	④　⑨

①　～④米、⑤神酒、⑥魚(干物)、⑦野菜(キャベツ・トマト)、⑧リンゴ、⑨桃の順に奉納。

成就祭の祝詞奏上。神輿前で宮司のみが奏上する。

17：15　玉串拝礼。神職全員で神輿前へ並び、宮司が代表して玉串を拝礼する。

その後、氏子会長、御田歌保存会長、四の輿召立(めしたて)役、四の輿頭の順で拝礼。

この間、楽奏あり。

17：20　撤饌(てっせん)。神饌は下げずにお神酒の蓋(ふた)を閉めるだけ。

宮司一拝。

17：25　御田歌。午前と同様に会長を筆頭に参列者で楽納めを歌う。約 9 分。

「阿蘇に居りたや坂梨越えて宮地、宮地名所のお宮に楽は絶えせぬ」

17：30 ごろ終了。

神職及び参列者で記念撮影。

17：40　神職 6 名が退下。この間楽奏。

【既存調査との相違】

・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、神幸行列が中止。これにより大幅に内容が変更されている。これにより参道の露店等もなし。

・清め祓いの順番が異なって、以前の記録より簡略化されている。祓所の位置も拝殿右手前に斎竹で囲ってあったものが、仮拝殿と社務所の間に移動している。これには、熊本地震で拝殿が被災したため、仮拝殿の位置に合わせて変更となった。

・式神楽が阿蘇古代神楽に。これは、新型コロナの影響で、例年外部依頼していた式神楽を中止とし、本年は阿蘇古代神楽で代替したため。

・昼夜舞われていた中江の神楽の奉納もなくなっている。

・直会が中止となり、弁当配布のみとなっている。

・本来御仮屋で行われる御饌(みけ)祭が仮拝殿で行われた。飯櫃(めしびつ)に入れてある神饌を出した状態で神前

に供える。

・村崎氏(1993)では、献幣祭の大祓には塩を榊の枝につけて撒くと記録にあるが、現在は塩水を榊の枝につけて撒いている。

・行列がある時は、成就祭の神事の前に楽納めを歌っていたが、今回は神事等全て終わった後に歌う。

写真 11	祓所 祓所での祓詞奏上の様子	
写真 12	祓所 祓所の大麻と塩水	
写真 13	御饌祭の神饌 9 種類の神饌が、全部で 14 基献饌される	

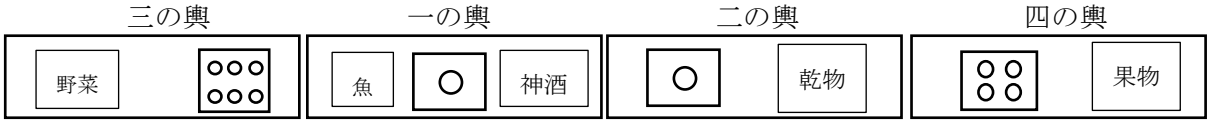
７－３．翌日祭

御田祭の翌日に行われる簡単な神事。過去の記録が少なく、変遷が追いにくい。

【翌日祭の行程】
日時：令和 2 年 7 月 29 日　10：00 開始
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

9：57　神職 5 名が入殿、この間楽奏。
10：00　修祓。神職 1 名が祓所で祓詞奏上、戻ってから別の神職が祓所の大麻(榊)を取り、神饌、玉串、神職らの順に清め、元に戻す。
10：05　宮司一拝
献饌。宮司以外の神職 4 名で行う。

（神輿前の神饌位置図）



神饌は、米、神酒（酒・塩・水）、魚(サバ)、海菜(ワカメ)、野菜(大根・人参・きゅうり)、果物(リンゴ)の順に神輿前に置いていく。

10：10　宮司祝詞奏上。翌日祭用の祝詞。
10：15　阿蘇古代神楽。茣蓙を神輿前に敷き、準備をする。幣舞を舞う。楽は大太鼓、横笛 2 本、銅拍子で、全部で 3 回舞う。
玉串拝礼。神職全員が神輿前に並び、宮司が代表して玉串拝礼。
10：25　撤饌。神酒の蓋を閉めるだけ。宮司一拝で終了。
神職ら 5 名が退下。

【既存調査との相違】
・この日の祭事に関しての記録は簡単のものしか残っておらず、比較が困難である。

７－４．後夜御遷座祭（せんざ）

御田祭の翌日、翌日祭の後の日が暮れてから行われる。神輿から御神体を取り出し、それぞれの神殿に還す神事で、方法は概ね前夜御遷座祭の逆の手順となる。

【後夜御遷座祭の行程】
日時：令和２年７月 29 日　20：00 開始
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

19：50　神職ら８名が仮拝殿と社務所の間で手を清める。
斎館に移動し、座敷に宮司を上座に４名ずつ２列で向かい合って座る。
解除祓（ばら）い。神職らが小声で唱える。
笏（しゃく）はらい。手にもった笏を右左右に振るう。再拝。
大祓詞奏上。全員で祝詞を奏上する。
笏はらい、一拝で終了。

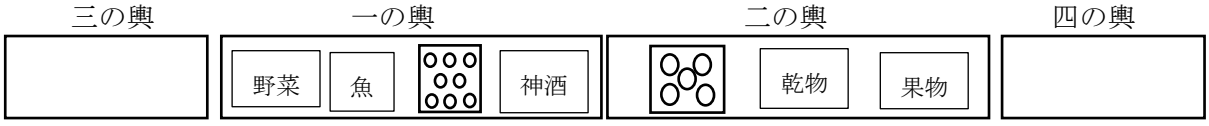
20：00　神職らが仮拝殿へ移動。遷座夫（せんざふ）が１名拝殿で待機している。
開始の太鼓の後、修祓（しゅばつ）。神職１名が祓所（はらえど）で祓詞奏上。

20：05　神職２名が祓所へ行き、１名が大麻、１名が榊枝と塩水を持ち、神饌、玉串、遷座夫の順に清める。
宮司による遷座前の祝詞奏上。

20：10　遷座の準備。神職全員が白マスクを着け、仮拝殿の窓・扉を全て閉め、電気を消す。
提灯２名、カヤの松明１名、三方（さんぽう）1 名、御幣１名、赤の大傘１名。
神輿の扉を開け、御神体を三方に載せる。ここから警蹕（けいひつ）しながら御神体と御幣を神殿へ運んでいく。
一の輿の１柱、三の輿の４柱、、二の輿の１柱、四の輿の４柱、三の輿の２柱の順に遷座する。この順番は前夜と変わらない。
全ての遷座が済むと仮拝殿の電気が点けられ、神職らも戻ってくる。各自マスクを外していく。

20：40　献饌（けんせん）。神職４名で行う。

（神饌位置図）



神饌（しんせん）は米（８皿）、米（５皿）、神酒(酒・塩・水)、魚(トビウオ)、乾物(ワカメ)、野菜(キャベツ・トマト)、果物(梨)の順に、一の輿・二の輿の前に置いていく。三の輿、四の輿には置かない。

20：45　　宮司による遷座(せんざ)後の祝詞(のりと)奏上。
玉串拝礼。神職全員が神輿前に並び、宮司が代表して玉串拝礼。
遷座夫による玉串拝礼。この時、楽奏あり。

20：50　　撤饌(てっせん)。神前の神酒の蓋(ふた)を閉めるだけ。神饌はそのまま。
宮司一拝。神職らで神輿前にて記念撮影。

20：55　　神職 8 名全員が退下。

【既存調査との相違】

・この日の祭事に関しての記録は簡単のものしか残っていない。村崎氏(1993)では、前夜御遷座祭と同様の神事とあるが、後夜御遷座祭では、始まる前に斎館での神事を執行している。

・榊(さかき)枝での祓いは、塩ではなく水(塩水)になっている。

・前夜御遷座祭の際は黄傘だったが、今回は赤色の大傘になっていた(既存調査通り)。これは、前夜は雨が降るの可能性があったから（前夜は赤の大傘は用意だけしていて使用しなかった)。

８．国造神社の眠り流し

新暦の８月６日に行われる、御田歌の歌い納めの神事。例年であれば、各地区の駕輿丁が決められた場所で歌いながら国造神社の宮司宅に集い、最後は国造神社拝殿で歌い納めをするが、今年は簡易的なものになった。これ以降、歌い初めまでは御田歌を歌ってはいけないという。

【眠り流し行程】
日時：令和２年８月６日　17：00 開始
開始場所：国造神社拝殿

15：30 ごろ　国造神社宮司が拝殿で茣蓙等の準備をする。
16：50 ごろ　氏子総代らが集まり始める。
　　時間になったら、拝殿の中に移動。
17：00　　開始。宮司の軽いあいさつで始まり、すぐに総代らが歌い出す。
　　この日は 10 名の氏子総代が集まった。Y シャツで、下駄の人はいない。
　　歌は楽納め(ガクオサメ)で、前後等の掛け合いは特にない。
　　宮司は正座してきく。
　　二礼二拍手一拝で終了、解散。

〈眠り流し歌詞〉
ガクオサメ「阿蘇にすみたや坂梨　越て宮地に　宮地名所のお宮に　楽は絶えせぬ」
※例年は拝殿の中で歌う。

【既存調査との相違】
・今年は駕輿丁は参加せず、氏子総代のみの歌い納めとなった。駕輿丁がいないために例年より早めの集合となり、このため来られない総代もいた。
・簡易的な神事となったため、各地区で歌って国造神社へ集まる、といった過程はすべて省略となった。そのため、各場所での歌いや直会等もない。

９．阿蘇神社の柄漏流し神事

阿蘇神社の御田歌の歌い納めにあたる神事。仙女伝説の残る田鶴原神社で夜渡祭を執行した後、例年であれば田鶴原神社から阿蘇神社、阿蘇神社宮司宅、宮地の町中を決められた場所で歌いながらゆっくりと移動する。今年は町中での歌いが中止となり、田鶴原神社及び阿蘇神社仮拝殿のみ略式で歌った。

【柄漏流し神事行程】
日時：令和２年８月６日　19：00 開始
開始場所：田鶴原神社拝殿

18：50 ごろ　駕輿丁らが田鶴原神社に集まり始める。
本殿扉が開けてあり、中に燈明が設置されているが、この日は風が強かったため、本殿・拝殿ともに燈明を撤去した。
拝殿では阿蘇神社の神職２名が祭壇等の準備をしている。

18：55　神事開始。神職２名と参列者８名が全員拝殿内に入る。参列者の内、駕輿丁頭はＹシャツにネクタイ。神饌は酒、塩・水、米。
修祓。神職１名が大麻の前で祓詞奏上の後、神饌、玉串、神職(斎主)、参列者の順に清める。
献饌、斎主祝詞奏上、玉串拝礼。玉串は神職、二の(輿)召立役、二の(輿)頭、一の(輿)召立役、一の(輿)頭、氏子会会長の順に拝礼。
撤饌、斎主一拝で終了。

19：10　神饌の神酒が参列者にふるまわれる。
参列者らが拝殿内の左手前に置かれている小さな提灯を持って、田鶴原神社の横に円になって歌う(マスク着用)。神職２名は拝殿の中できく。
歌は、「一つ謡ひて此の田の　神に参らせう」のフレーズのみ。

19：20　提灯を持ったまま阿蘇神社へ移動、この間歌わない。
一度楼門前に行き、三の輿・四の輿の代表者らと合流する。三・四の輿も一つ小さな提灯を持っている。すぐに仮拝殿へ移動。

19：30　全部で 15 名の駕輿丁頭や召立役、氏子会及び御田歌保存会の代表者らが集まる。
特に合図等なく立ったまま歌い始める。前後等の掛け合いはない。阿蘇神社の神職ら５名が脇できく。祭壇や神饌等は特に用意しない。
歌は楽納めの内、以下のフレーズのみ。
「阿蘇に居れたや坂梨　越て宮地に　宮地名所のお宮に　楽は絶えせぬ」

19：40　御田歌保存会会長を代表に二礼二拍手一拝で終了。
宮司あいさつ。参列者には１名１升ずつ神酒が配られる。
写真撮影をして解散。

【既存調査との相違】

・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、神事の行程が大幅に変更されている。

・田鶴原神社での神事において関係者が全員拝殿に入っていることについて、コロナの影響があるか今後継続調査の必要あり。また田鶴原神社で歌う際に半円形から円形になっている。

写真 14	田鶴原（たづわら）神社 田鶴原神社での歌い納めの様子 一の輿、二の輿の駕輿丁（かよちょう）ら(今回は代表のみ)が円形になって歌う	
写真 15	阿蘇神社仮拝殿 阿蘇神社仮拝殿での歌い納めの様子 三の輿、四の輿の駕輿丁らも合流して歌う	

１０．霜神社の火焚神事

霜害を鎮めるため、火焚乙女が火焚殿において 59 日間火を焚き続ける神事。神事の起源として、健磐龍命と鬼八の伝説が残る。注連縄を張り替える「注連卸し」、御神体を遷座し火焚所に火入れを行う「乙女入れ」、御神体を包む綿を取り替える「温め綿入れ」、火焚きを終え御神体を還御する「乙女揚げ」、夜渡神楽、霜神社例祭から成る一連の神事をいう。今年は一部略式で実施され、今回はその一部である「乙女入れ」と「乙女揚げ」の調査を行った。

１０－１．乙女入れ

霜神社の御神体を火焚殿へ遷座し、火を焚き始める神事。神幸の途中で、近くの天神と呼ばれる祭場へ寄る。今年は神幸行列を略式で行った。

【乙女入れ行程】
日時：令和 2 年 8 月 19 日（水）10：30 開始
開始場所：霜神社拝殿

8：30 ごろ　氏子や公役、宮司が集合、拝殿の清掃や神饌等祭壇の準備。
神饌は、左から果物(バナナ・柑橘類 2 種)、鯛(2 匹)、塩・水・米、神酒、野菜(トマト・ナス・トウモロコシ)。神輿の前に神饌を並べ、向って左に祭神を表す御幣(紙垂)と玉串が、右に猿田彦が立て掛けてある。
火焚乙女(以下、乙女)は 10 時頃に来て着付けと玉串拝礼の作法の練習を行う。

10：35　宮司と乙女が裏の火焚所に移動し、火焚所の祓い清めを行う。
宮司が表(祈禱所)に行き、舞きり式の道具で火おこしをする。火の付きが悪いときはチャッカマン等で火を大きくする。火がおこると火焚所へ持っていき、小窓から中にいる乙女とその祖母(以下、祖母)に渡す。乙女と祖母が火を大きくしていく。しばらくすると火を小さくし、熾火の状態にする。

11：00　霜神社拝殿へ乙女らが移動。拝殿へは宮司、乙女、祖母、氏子 9 人（今年は竹原区が当番）が入る。

11：05　修祓の儀。宮司が祝詞奏上後大麻で神饌、御幣(玉串)、乙女・祖母、氏子、その他参列者(拝殿外)の順に清める。
献饌では、神酒の蓋を取った後に祝詞奏上、警蹕3 回。
祭祀の祝詞奏上後、玉串拝礼。玉串は宮司、乙女、祖母、氏子 9 名の順。
その後、氏子らが猿田彦と御幣 7 本を 1 人 1 本ずつ持って行列の準備をする。
この間、宮司は神殿の扉を開けて祝詞奏上後、御神体を取り出し、荷車に乗せる。
警蹕はしない。
行列は猿田彦、御幣 7 名、宮司、乙女、祖母、御神体の順で移動。

11：35　天神の祭場へ到着。猿田彦と御神体 7 本を神木の両脇に置き、立ったまま神事を行う。宮司が祝詞奏上後、警蹕を 1 回して終了。
先ほどと同じ順の行列をなして火焚殿へ移動する。

11：40　火焚殿へ到着。祭壇の準備をする。梯子をかけて御神体を入れる小部屋の扉を開けて、遷座する。この時警蹕はしない。
また、乙女・祖母と総代輪番区の 3 名のみが祈祷所に入り、その他氏子らは外で待つ。
開始の太鼓で神事を始める。修祓の儀、神饌、玉串・御幣 7 本、乙女・祖母、総代ら 3 名の順に清める。その後、祝詞奏上、玉串拝礼（宮司、乙女、祖母、総代 3 名）の順に拝礼する。その後、撤饌してから警蹕を 1 回の後、全員で拍手を 2 回をして終了。御神体はそのまま乙女揚げまで置いたまま。

12：05　事務連絡をしてから解散。直会なし。

【既存調査との相違】
・今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、神輿は出さず、行列の人数を減らした。また、同様の理由で神事の開始が午前中に早まり、火焚所の火も点けるとすぐに消してしまった。そのため、火は焚き続けないが御神体は置いたままという形をとった。直会も中止となった。ただし、宮司と火焚乙女、祖母のみ弁当が配布された。
・下役犬原区長によると、阿蘇神社等の農耕祭事が神事のみとなったことにヒントを受けて、今回のような形になったという。本来ならば竹原区の氏子のみで行うが、今年は簡略化ということもあり、他部落(上下役犬原区)からも応援で参列した。
・コロナの影響以外の相違としては、火のおこし方である。以前は宮司が虫眼鏡で点けていたが、今は舞きり式の火おこし器を使用している。
・遷座(神殿→神輿、神輿→火焚所)の際に警蹕をしなくなっている。

写真 16	火焚神事	
	火焚殿での神事の様子 火焚きをする部屋の上部に御神体を遷座する	

１０－２．乙女揚げ

火焚きを終え、御神体を霜神社へ還御する神事。乙女入れと同様、神幸の途中で天神へ寄る。今年は神幸行列を略式で行った。

【乙女揚げ行程】

日時：令和 2 年 10 月 16 日（金）9：30 開始

開始場所：火焚殿祈祷所

9：30 ごろ　神事開始。火は熾火の状態にしておく。参列者は宮司、火焚乙女(以下、乙女)、火焚乙女の祖母(以下、祖母)、氏子 3 名。火焚殿祈祷所の外に、その他氏子ら 12 名が参列。氏子のほとんどは同じ羽織を身に付けている。

神饌は、左から果物(バナナ・リンゴ・柿・みかん)、魚(鯛)、塩(塩・水・米)、神酒、野菜(人参・大根・キャベツ)の 5 基。

大祓、献饌、祝詞奏上と続き、玉串拝礼では宮司、乙女、祖母、氏子 3 名の順に行う。

撤饌。神酒の蓋を閉めたあと、何事かつぶやき、警蹕を 1 回して終了。

10：00　氏子の 1 人が火焚所の火に土か何かをかぶせてゆっくりと火を消す。

宮司その他氏子らは、御神体を降ろして大八車に乗せ、神幸行列の準備をする。御神体が入っている扉を開けるときのみ警蹕をする。行列の順番は、猿田彦(鬼八)、御幣 7 本(7 名)、宮司、乙女、祖母、御神体の順で、天神の祭場に向かう。それ以外の氏子らは、神饌を持って霜神社へ移動する。

10：10 ごろ天神へ到着。樹木の前に猿田彦、御幣 7 本を置く。御神体を乗せた大八車は少し手前に安置する。

宮司が祝詞奏上、警蹕をしてからすぐに出発。上記と同様の順番で霜神社へ。

10：15　霜神社到着。猿田彦、御幣、神饌を祭壇に準備し、御神体は白布ごと本殿内へ。

この間、警蹕はない。通常の祭礼で使用する神輿は幣殿に安置してある。

10：25　霜神社拝殿にて神事開始。拝殿内には、宮司、乙女、祖母、氏子 12 名。

大祓奏上後、献饌、祝詞奏上、玉串拝礼、撤饌、一同一礼二拍手で終了。

玉串は、宮司、乙女、祖母、氏子 7～8 名が拝礼。

10：50　火焚殿へ戻り、片付けをする。このとき、火はほとんど消えている。

【既存調査との相違】

・今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、神輿は出さず、行列の人数を減らした。また、同様の理由で神事の開始が午前中に早まり、直会も中止となった。

・簡略式になったためか、火焚乙女とその祖母による「火納め」がなく、代わりに氏子が火を消した。

・宮司による御神体の移動については、警蹕(けいひつ)は扉を開けるときだけ行い、軍手はしていない。マスクについては、感染症対策のためか、天神(てんしん)までは着用していた。

・村崎氏(1993)によると、御幣 7 本や小幣 2 本、金幣 1 本を御神体と一緒に本殿へ納めていたが、今回は御神体の入った黒塗りの箱のみを本殿へ納めた。

・神幸行列に使用される猿田彦について、宮司と地元の人は「鬼八さん」と呼んでいる。霜神社及び火焚神事は、鬼八の伝承と縁が深いため、その呼び名になった可能性がある。

・神饌が 7 基から 5 基に減っている。

・後日予定していた夜渡(よど)と満願日が、コロナ対策で中止となり、今年の夜渡は 18 日の午前中に総代や区長のみの少人数で行われた。

写真 17	鬼八さん 神幸行列に使用する鬼八さん（猿田彦）	
写真 18	天神 神幸行列の祭場の一つである天神での神事の様子	

１１．国造神社の田実祭

１１－１．田実祭

収穫を祝う簡単な神事を行い、例年であれば青年会等による催しがあるが、今年は宮総代数名のみによる神事となった。

【田実祭行程】
日時：令和 2 年 9 月 23 日（水）10：00 開始
開始場所：国造神社拝殿

前日に拝殿等の掃除、準備を行っている。
9：30 ごろ　総代らが北宮館へ集まりはじめる。北宮館内では世話役の人が弁当包の準備。
10：00　神事開始。参列者は神職(宮司)1 名と総代 7 名(途中から 8 名)。
神饌は、上段左から野菜(人参・ナス・ブロッコリー・じゃがいも)、神酒(神酒・水・塩)、米(土器4 基)、乾物(魚)、果物(バナナ・リンゴ)、下段左から稲、献幣料の箱。
修祓の儀。祓詞奏上後、神饌、玉串、参列者の順に大麻で清める。
すぐに献饌、祝詞奏上、玉串拝礼(宮司、総代長)、撤饌で終了。
10：10　宮司挨拶。神饌のみ片付け。
10：20　弁当、手ぬぐい、酒(清酒・ビール)、神饌のお下がりを配布して解散。

【聞き取り等】
・年によっては青年会が主催した映画鑑賞会や出店が行われていた。曜日によって田実祭の日かその前日かは異なっており、主に夕方～夜に行われた。

【既存調査との相違】
・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で、総代のみの参列となった。神事後の直会も中止して代わりに弁当の配布をしている。
・奉納相撲大会は、子供の数が減り、平成 28(2016)年 3 月で古城小学校が閉校したのを契機に平成 28(2016)年度からやらなくなっている。
・村崎氏(1993)では、阿蘇神社から 1 名を来賓として呼んでいたが、30 年程前からは読んでいない。これは、村崎氏の調査時が国造神社の前宮司の時代に取っていた形式で、現在では基本的に宮司 1 人で神事を執り行っている。

１１－２．翌日祭

田実祭の翌日に行われる簡単な神事。過去の記録が少なく、変遷が追いにくい。

【翌日祭行程】
日時：令和 2 年 9 月 24 日（木）9：00 開始
開始場所：国造神社拝殿

8：50　神事開始。神職 1 名のみ。神饌(しんせん)は、左から野菜(ナス・トマト・人参)、神酒(酒・塩・水)、米(土器(かわらけ)4 基)、干魚、果物(梨)、奥に稲。
修祓(しゅばつ)、献饌(けんせん)、祝詞奏上、玉串拝礼、撤饌(てっせん)の簡単な神事で、10 分程度で終了。

【聞き取り等】
・神饌の稲は、国造神社横の御神田で採れた米で、これは神社の配膳の女性が世話をしている。御田植式に使用する苗もこの田のものを使用する。
・また、前日夜に催し等があった場合は、その片付けが行われていた。

【既存調査との相違】
・例年は総代が参列するが、今年は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で神職のみで神事を行った。神事のみだからか、開始時間も早まっている。
・その他詳細な相違については、過去の記述が少ないため不詳。

１２．阿蘇神社の田実祭

秋の実りに感謝する収穫祭で、例年であれば願の相撲の後に流鏑馬が奉納されるが、今年は神事と願の相撲のみとなっている。また、相撲には多くの工事関係者が参加した。

１２－１．田実祭

【田実祭行程】

日時：令和 2 年 9 月 25 日（金）10：00 開始

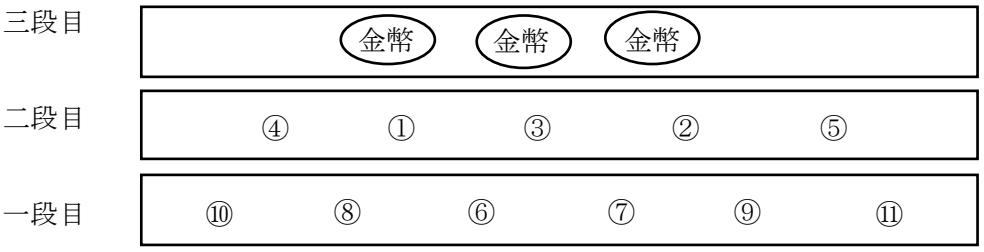
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

9：45 ごろ　神職が社務所玄関で手水をしてからその場に待機する(手水の儀)。
参列者は、氏子会長・副会長(2 名)、各輿頭と各輿代表(1~4 輿)、社家代表の 12 名。
神職は全 8 名。

9：59　神職ら 5 名と氏子会長が仮拝殿へ入殿。

10：00　開始の太鼓。修祓の儀。神職 A が大麻の前で祓詞を奏上後、神職 B が大麻で神饌、玉串、神職、参列者の順に清める。
斎主(宮司)一拝
献饌。雅楽奏(龍笛、笙、篳篥)あり。神職 4 名で神饌を祭壇に置いていく。

（献撰の順番と配置図）



神饌は、①米(土器8 皿)、②米(土器 5 皿)、③神酒(酒・塩・水)、④稲、⑤鏡餅、⑥魚、⑦乾物(海苔他)、⑧野菜(蓮根・大根・人参・生姜)、⑨果物(バナナ・リンゴ・梨)、⑩菓子、⑪赤飯の順で置く。最上段は金幣3 本。配置は上記の通り。

斎主祝詞奏上

10：20　阿蘇古代神楽。幣舞のみ。舞手は神職 A で、右手に鈴、左手に御幣を持って舞う。
楽は太鼓、横笛 2 本、銅拍子。3 回舞った後、採物の御幣を参列者の頭をなでる。
戻って反時計回りに 1 回まわった後、一礼して終了。

玉串拝礼。神職ら 8 名(代表・宮司)、氏子会長、駕輿丁代表(四の輿頭)、社家代表の順に拝礼。この間雅楽奏あり。

撤饌。神職 A が神酒の蓋を閉めるだけ。

斎主一拝で終了。宮司あいさつ。

10：40 ごろ神職 5 名退下。このとき笙のみ奏する。

願の相撲準備。土俵は拝殿右手に事前に準備がしてあり、丸く作った土俵の四隅を斎竹で囲まれている。また、斎竹には赤(南西)、黄(北西)、緑(南東)、紫(北東)の紙垂がくくり付けられている。力士が南北に一・二の輿、三・四の輿で並んで紅白のまわしを締める。先に勝敗を決めてから行う。今年は各輿から 2 名ずつしか来ていないため、復旧工事関係者が代理で力士になった。

10：50 ごろ修祓の儀。神職が土俵中央に設置された祭壇の前で祓詞奏上、その後御幣(榊)を持って斎竹(緑・赤・黄・紫の順)、祭壇、相撲奉仕者の順に祓う。今年は三の輿が遅刻したため、その人は到着次第清める。

祓いが終了次第、祭壇(八足台)を土俵から除けて、紅白のまわしを奉仕者へ配布する。相撲奉仕者は、土俵の東側に 8 名ずつ向かい合って並び、神職が勝敗を事前に決める。交互に勝ようにして、勝った方が「願の相撲かのう(叶う)」を宣言する。並びと順番は以下の通り。取り組みは対角線にいる人間同士で組む。なお、赤いまわしが一・二の輿の駕輿丁、白いまわしが三・四の輿の駕輿丁が担う。

（相撲奉仕者の並びと取組の順番）

北側(白まわし)　⑦　⑥　⑤　④　③　②　①　⑧※

南側(赤まわし)　①　②　③　④　⑤　⑥　⑦　⑧※

※は遅れて参加

最後の 8 組目の取り組みの前に、行司が最後という旨の宣言をして始める。

8 組目終了後は同様に向かい合って並び、一礼して終了する。

11：00 ごろ終了。片付けは神職が行い、神事参列者及び相撲奉仕者へは赤飯と神酒を配布。

【既存調査との相違】

・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、参列者の数を大幅に減らし、流鏑馬式の奉納と直会を中止している。

・早朝から楽を鳴らす「朝起こし」は行っていない。

・願の相撲について、相撲奉仕者の人数が 14 人から 16 人に変わっている。これは、遅参した参加者もいたため、結果として増えてしまったためである。本来は 7 名×7 名の計 14 名が奉仕者の人数である。新型コロナの対策のため駕輿丁が各輿 2 名ずつの計 8 名しか参加できなかったことから、不足分の奉仕者は復旧工事関係者から選出している。また、行司も輿頭ではなく神職が担っている。これは、今回の参列者が輿頭と代表のみとなっているため、神職が代理として行った。

・村崎氏(1993)で記録にある、境内か隣接地に設置される特設舞台で行われていた氏子会主催による奉納演芸会について、今年は行われなかった。近年、氏子らによるこういった演芸会は行われていない。

・一の宮町(1984)では、御前迎えと同様に前夜・後夜の御遷座祭の記述がある。これは、社務所

ではなく仮殿(祈祷殿)が建っていたころのことで、神輿を(おそらく 1 基)仮殿に移動させ、神事を行っていた。しかし、その後社務所ができたことでその必要がなくなり、結果村崎氏(1993)においては、遷座祭がなくなっており、現在に至る。

写真 19	社務所前 神事の前の手水の儀の様子	
写真 20	阿蘇古代神楽 田実祭における阿蘇古代神楽の幣舞の様子	
写真 21	願の相撲 阿蘇神社境内における願の相撲の様子	

１２－２．田実祭翌日祭

田実祭の翌日に行われる簡単な神事。過去の記録が少なく、変遷が追いにくい。

【翌日祭行程】
日時：令和 2 年 9 月 26 日（土）10：00 開始
開始場所：阿蘇神社仮拝殿

9：50 ごろから社務所前で手水の儀。神職が拝殿との間で待機。
参列者は金婚夫婦 1 組(2 名)、氏子代表 2 名
10：00 ごろ神職 4 名が入殿。このとき笙のみ奏す。
修祓の儀。神職 A が大麻の前で祓詞を奏上。その後神職 B が神饌、玉串、神職、参列者の順に清める。
斎主(宮司)一拝
献饌。神職が神酒の蓋を開けるだけ。
斎主祝詞奏上。このとき祝詞内で金婚の方々の名前を読み上げる。
10：20　阿蘇古代神楽。幣舞を奏上。楽は太鼓、横笛、銅拍子。
2 回舞ってから採物の御幣で鈴を鳴らしながら参列者の頭をなでる。
最後に舞った茣蓙の上で一拝して終了。
玉串拝礼。宮司、金婚夫婦、氏子会長の順に拝礼。この間、龍笛・篳篥の楽奏。
撤饌。神酒の蓋を閉めるだけ。
斎主一拝の後、宮司挨拶。
10：35　神職 4 名が退下。この間、笙のみ奏す。

【既存調査との相違】
・新型コロナウイルス感染症拡大防止対策で金婚奉告祭における金婚夫婦の参列を大幅に制限し、代表の一組のみが参列。これは、そもそも参列者なしの予定であったものが、諸事情により一組のみが参列することになったためである。
・村崎氏(1993)では献茶祭の記録があるが、過去 20 数年献茶祭を行ったことはない。また、他の記録においてもその記述がないため、この時期のみお祭りに合わせて開催していたと推測される。

○参考文献一覧

・阿蘇惟之編　「阿蘇神社」　平成 19(2007)年　学生社
・阿蘇品保夫　自然と文化阿蘇選書 2「阿蘇社と大宮司」　平成 10 年　熊本日日新聞社
・伊東龍一・阿蘇品保夫・池浦秀隆・吉村豊雄・佐藤征子編著　「阿蘇市文化財調査報告第一集阿蘇市指定有形文化財阿蘇神社建造物調査報告書」　平成 18 年　阿蘇神社・阿蘇市教育委員会
・佐藤征子　自然と文化阿蘇選書 11「神々と祭の姿」　平成 10 年　熊本日日新聞社
・村崎真智子　「阿蘇神社祭祀の研究」　平成 5(1993)年　法政大学出版局
・神道文化会　「高千穂・阿蘇」　昭和 35(1960)年・昭和 56(1981)年復刊　原書房
・一の宮町教育委員会　「阿蘇の農耕祭事」　昭和 59(1984)年
・阿蘇町町史編さん委員会　「阿蘇町史　第 1 巻　通史編」　平成 16 年　阿蘇町
・阿蘇町町史編さん委員会　「阿蘇町史　第 2 巻　資料編」　平成 16 年　阿蘇町
・文化庁　国指定文化財等データベース［https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index］(最終検索日：2021 年 1 月 13 日)
・熊本市博物館　熊本木曜談話会主催「熊本の民俗文化とその魅力―民俗文化財の記録と保護に関するミニ・シンポジウム―」講演録
［ https://kumamoto-city-museum.jp/application/files/1415/5375/6391/No28-13kenkyuu8p163-204.pdf ］(最終検索日：2021 年 2 月 8 日)

○おわりに

「はじめに」で述べたとおり、「阿蘇の農耕祭事」に関する近年の記録の少なさが課題でした。個人の研究としては、村崎真智子氏による非常に優れた詳細調査がされており、「阿蘇神社祭祀の研究」（平成 5 年刊行）としてまとめられています。本調査においても、村崎氏の調査記録をはじめ様々な記録と比較をすることで、その変遷をたどることができました。これは、時代の流れとともにどうにか農耕祭事を継承しようという、神社関係者やそれを支える氏子の方々の類まれな努力の表れです。特に令和 2 年の農耕祭事は、新型コロナウイルス感染症拡大の渦中において、その努力・工夫を垣間見ることができる貴重な記録となりました。

阿蘇神社における多くの農耕祭事が中世、近世には旧社家を中心に執行するものであり、近代、現代と時代が下るにつれ神社主体のものに変化してきた歴史があります。そのため、地元氏子の中には祭事は神社が地元に依頼しているという考えの方もいて、神社と地域組織との関係に濃淡があります。村崎氏(1993)もこういった歴史的な背景によって宮座などの氏子側の祭祀組織が弱いことを指摘しており、氏子や関係者の中で意識の差が出てきていることが継承における課題です。

本文中に述べたとおり、今回の調査においては各神社関係者及び氏子への聞き取り調査が不足しています。特に神社の各神事の中での農耕祭事の宗教的な位置づけや、祭事にあたっての準備や組織形態、氏子をはじめ関係する方々の各祭事に対する思いなど、民俗調査としては不十分なところが多く、今後も継続して調査を行う必要があります。また、祭事の変遷に関する研究や考察も不十分であり、これも課題として挙げられます。

日々変化する社会情勢の中で、そもそも「阿蘇の農耕祭事」の価値はどこにあるのか、価値を保持したままいかに継承していくのかを考え続けていくことが、微力ながらも地方自治体のできる無形民俗文化財に対する支援の一つであると思います。今後、大学をはじめとする研究機関や民間における「阿蘇の農耕祭事」研究が活発となり、本書がその研究の一助となることを望みます。

最後に、本調査にご協力いただいた神社関係者、氏子及び地元関係者の方々へ感謝申し上げます。